

下向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査

2019. 10

岩手県洋野町教育委員会

下向II遺跡発掘調査報告書

太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査

序

洋野町は岩手県の最北端に位置し、北は青森県三戸郡階上町、西は軽米町、南は久慈市、東は太平洋に接し、海と高原に囲まれた自然豊かな町です。平成18年1月1日、旧種市町と旧大野村が合併して洋野町が誕生しました。

町内には現在219箇所の遺跡が登録されています。先人の残したこれらの文化遺産を保護し、保存していくことは私たち町民に課せられた重大な責務であります。

本報告書は、太陽光発電所建設工事に伴う下向Ⅱ遺跡の埋蔵文化財調査の報告をまとめたものです。この調査の結果が今後この地域の歴史を解明する上で、いさかでもお役に立てれば幸いです。また、本書が関係者はもちろん、広く町民の方々に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護に多少なりとも寄与されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、多大なご助言ご協力をいただきました関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

令和元年10月

洋野町教育委員会

教育長 林 剛敏

例　　言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡洋野町中野第1地割地内に所在する、下向Ⅱ遺跡発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、太陽光発電所建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、調査に係る費用は事業主に負担いただいた。事業主は次のとおりである。
Tsubaki Solar 合同会社
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号は IF99-0251 である。
4. 調査主体者：洋野町教育委員会
担当者：千田政博
5. 調査指導 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課
6. 資料の分析・鑑定については下記の方々、機関に依頼した。(順不同・敬称略)
遺跡の地質調査：日本地質学会会員 松山力
自然科学分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
7. 依頼原稿について執筆者の氏名は、文頭に記載してある。
8. 第IV章及び第V章を除き本報告書の執筆・編集・構成は千田政博が担当した。
9. 野外調査に際して、下記の方々からご協力を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略)
株式会社岩手測器社、有限会社薩摩建設
10. 発掘調査作業においては、次の方々にご協力いただいた。(五十音順、敬称略)
安藤セツ、岩谷タミ、金澤ユウ子、川戸らせ、黒坂吉蔵、小坂恵、大道きよ、館野隆、塙野忠男、庭瀬チサ子、庭瀬麗子、樋谷エリ子
11. 室内整理、報告書作成にあたって、次の方々にご協力いただいた。(五十音順、敬称略)
村田千鶴、横山香
12. 座標点の測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。
座標点の測量：株式会社北山測量設計
空中写真撮影：エイト技術株式会社
13. 調査で得られた諸記録等については、洋野町教育委員会で保管、管理している。
14. 引用・参考文献については文末に収めた。

目 次

序
例 言
目 次
凡 例

本 文

I.	遺跡の概要と調査に至る経緯	
1.	遺跡の概要.....	3
2.	調査に至る経緯.....	3
II.	調査の概要	
1.	野外調査について.....	3
2.	室内整理作業について.....	4
III.	洋野町内の遺跡.....	5
IV.	遺跡の地形と地質	
1.	地学的環境概要.....	17
2.	遺跡の土・地質.....	17
V.	下向Ⅱ遺跡の自然科学分析	
1.	試料.....	19
2.	分析方法.....	20
3.	結果.....	22
4.	考察.....	28
VI.	調査の成果	
1.	検出された遺構について.....	36
2.	まとめ.....	36
写真図版.....		31
報告書抄録.....		41

表

第1表 町内の遺跡一覧(1).....	12	第2表 放射性炭素年代測定結果.....	23
第1表 町内の遺跡一覧(2).....	13	第3表 花粉分析結果.....	24
第1表 町内の遺跡一覧(3).....	14	第4表 植物珪酸体含量.....	24
第1表 町内の遺跡一覧(4).....	15	第5表 テフラ分析結果.....	25
第1表 町内の遺跡一覧(5).....	16	第6表 重鉱物火山ガラス比分析結果.....	25

図 版

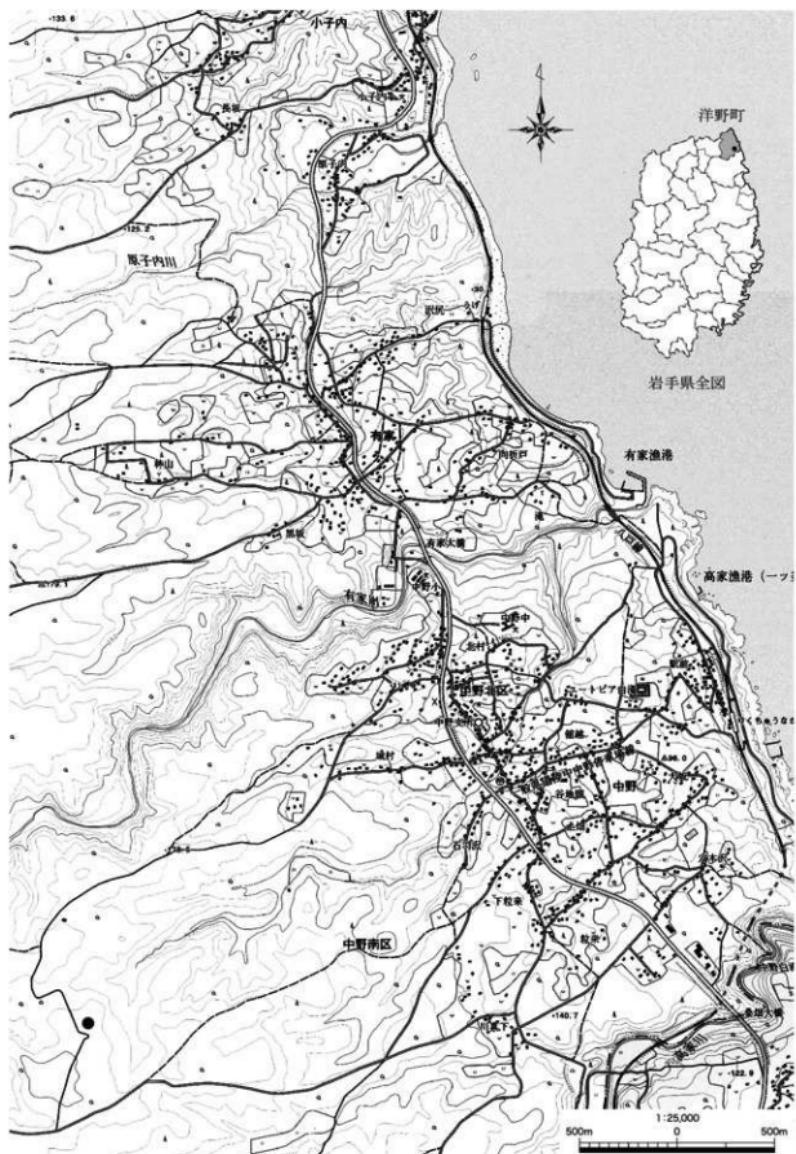
第1図 遺跡位置図	1	第7図 重鉱物火山ガラス比	26
第2図 遺跡範囲図	2	第8図 火山ガラス屈折率	27
第3図 町内の遺跡位置図	11	第9図 斜方輝石の屈折率	28
第4図 深掘1土層序	17	第10図 調査区範囲図	34
第5図 深掘1断面試料採取位置	20	第11図 遺構配置図	35
第6図 放射性炭素年代測定結果	23	第12図 土坑・溝状土坑	37

写 真 図 版

写真図版1 花粉分析プレパラート内の状況・植物珪酸体	31	写真図版4 遺跡遠景・近景	38
写真図版2 テフラ	32	写真図版5 遺跡全景・深掘1土層序	39
写真図版3 重鉱物・火山ガラス	33	写真図版6 土坑・溝状土坑	40

凡 例

1. 遺構図版の溝状土坑・土坑の縮尺は1/60である。
2. 本書で使用する遺構表示記号は下記による。
TP:溝状土坑 SK:土坑
3. 第11図遺構配置図、第12図の遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
4. 第1図遺跡位置図、第2図遺跡範囲図及び第3図町内の遺跡位置図は25,000分の1の洋野町管内図、第10図調査区範囲図は岩手県遺跡情報検索システム(平成30年度データ)所収の地形図を複写して使用した。
5. 遺構写真図版は縮尺不定である。掲載順は遺構図版と同様である。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡範囲図

I. 遺跡の概要と調査に至る経緯

1. 遺跡の概要

下向Ⅱ遺跡は、洋野町役場種市庁舎から南南東13.4km、JR八戸線中野駅から西南西3.7kmの洋野町中野第1地割地内の丘陵地に位置する。海岸からは3.8kmであるが、旧種市町は全般に海岸から3km以上離れた丘陵地にはほぼ山林で、また、中野地区は開発が少ない地域であり遺跡の様相は不明である。近隣の遺跡としては三陸沿岸道路建設に伴う発掘調査が行われた下向Ⅰ遺跡と中野城内遺跡がある。下向Ⅰ遺跡では陥し穴状造構や繩文時代中期～後期の土器片、弥生時代中期～後期の土器片が出土している。中野城内遺跡でも陥し穴状造構が検出されたほか早期中葉の白浜式の特徴を持つ貝殻文土器が出土している。

本遺跡を中心とした一帯は、昭和期に製炭が盛んに行われていた場所で、埋蔵文化財包蔵地の登録はなかったが、試掘調査により新規に発見された遺跡である。

2. 調査に至る経緯

本調査は太陽光発電所建設に伴い実施されたものである。その経緯は平成27年2月2日、事業者から事業地の埋蔵文化財包蔵地の所在について照会があり、事業地面積が広大なため試掘調査が必要であるとの回答を行った。その後平成27年5月27日付けで試掘調査依頼書の提出があった。平成27年7月13日～21日まで328.376m²を対象に試掘調査を実施し、造構、遺物の確認がなかったため、工事着手が可能である旨を通知した。その後、平成30年3月28日、追加の試掘調査の依頼書が提出された。平成30年10月9日～同月19日まで24,485m²を対象に試掘調査を実施した結果、溝状土坑、土坑跡とみられるプランを確認し、協議が必要である旨の回答結果を通知した。事業者と協議の結果、設計変更が不可能とのことから、発掘調査を実施することとなり、平成31年1月15日、文化財保護法第93条第1項の規定により届出に係る進達依頼が洋野町教育委員会へ提出された。その後平成31年1月21日、教生第33-418号により、岩手県教育委員会教育長より発掘調査を実施するよう通知がなされ、同年3月13日、発掘調査の依頼書が洋野町教育委員会へ提出された。平成31年4月9日より同月25日まで発掘調査を実施した。

II. 調査の概要

1. 野外調査について

発掘調査の対象地は、長辺が50m、短辺が25mの長方形で、それらを網羅する調査範囲用のグリッドを設定した。区画原点は第X系X=32800.000m、Y=77842.000mで、この原点から東方及び南方へ一辺4mの区画を設定した。区画名は東西方向のXラインには1から12までの算用数字を順に与え、南北方向のYのラインにはAからOまでの15文字のアルファベットを付した。

グリッド設定のために設置した基準点の成果は以下のとおりである。

基準点1 X=32728.821 Y=77881.047 H=189.377

基準点2 X=32814.012 Y=77957.898 H=191.113

基準点3 X=32820.684 Y=77849.343 H=186.546

表土中に遺物の包含が確認されなかったことから、重機による表土除去を行った。その後動態によるクリーニングを行い遺構の検出を行った。遺構の検出は、本報告書の第IV章「2. 遺跡の土・地質」において掲載されている松山力氏が区分した土層序（17頁第4図）の第4層～第5層上面で行った。

遺構の精査については、堆積土層の観察用セクションベルトを残す2分割を基本として設定し、土層の堆積状況の確認や記録を行い完掘した。遺構内堆積土は上位から下位に算用数字を付し、土層観察の注記は標準土色帖に振り記録した。遺構内堆積土層断面の実測及び遺構の平面実測については、株式会社CUBICの「遺構実測支援システム（遺構くん）」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の名称は検出順に番号を設定し、室内整理作業においてもそのまま番号を用いて登録した。

野外調査での写真撮影は遺構、遺物の検出状況や出土状況に応じて適宜行うこととし、35mmカメラ1台（モノクローム）を主に使用し、補助としてデジタルカメラも併用した。調査の終了段階で調査区直上の全景写真的航空写真撮影（デジタルカメラ）を業務委託として行った。

2. 室内整理作業について

野外調査終了後、記録を整理し発掘調査報告書の編集作業を行った。野外調査で撮影したフィルム写真は、現像した後、ネガ毎に撮影記録の記入を行いアルバムに収納した。デジタル写真についてはデータのリネーム、コンタクトシートによる出力を行った。遺構図面については、株式会社CUBICの「遺構実測支援システム（遺構くん）」で作成した第一原図のデータを基に、報告書掲載用の図版として第二原図の編集を行った。

また、これらの作業と併行して自然科学分析等を行い、原稿執筆、表の作成、作成した個々の挿図や調整済みの画像を併せて報告書を編集した。

III. 洋野町内の遺跡

洋野町内に所在する遺跡は、平成 31 年（2019）4 月現在、岩手県道跡台帳に 219 遺跡が登録されている。平成 23 年（2011）以降、三陸沿岸道路建設や再生可能エネルギー事業等に係る試掘調査により新規発見の遺跡が増加している。

町内遺跡詳細分布調査は、旧種市町が行った平成 16 年度（2004）の角の浜・伝吉・平内・麦沢（姥沢）地区的分布調査のみである。旧大野村分についても実施しておらず、町内には未発見の遺跡が多く所在するものと想定される。町内の発掘調査は岩手大学草間俊一教授により昭和 30 年（1955）から昭和 36 年（1961）にかけて遺跡の踏査と発掘調査が行われたのが最初であるが、その後平成 25 年度（2013）までの調査事例は数件にとどまっていた。平成 26 年度（2014）以降、三陸沿岸道路建設等に伴う本発掘調査により調査事例が急激に増加したものとの、町内に所在する遺跡の様相については不明な部分が多い。

旧石器時代の遺跡の登録はないが、「角川日本地名大辞典 3」によると、旧石器遺物出土遺跡として鉄山遺跡（大谷鉄山か？）、有家遺跡（上のマッカ遺跡か？）が紹介されている。和座川上流の海岸段丘上に立地する鉄山遺跡から石刀、剥片、敲石が出土、海岸段丘上に立地する有家遺跡から石斧、剥片が出土し、いずれも高館火山層最上部から発見されたとある。しかし、遺跡の名称は現在登録されているものに該当せず、詳細は不明である。

縄文時代の遺跡数は、全体の 7 割以上を占める。草創期の遺跡は現在のところ登録はないが、洋野町境から 3km の青森県三戸郡階上町大字平内にある流域遺跡では爪形文土器が出土している。また、階上町に隣接する八戸市南郷区黄櫅遺跡、洋野町に隣接する軽米町馬場野Ⅱ遺跡でも草創期の土器が出土していることから、町内からも出土する可能性がある。

早期の遺跡として、ゴッソー遺跡（20）、大宮Ⅱ遺跡（47）、大宮Ⅰ遺跡（48）、宿戸遺跡（199）、中野城内遺跡（203）などがある。大宮遺跡は、昭和 36 年（1961）に草間教授により発掘調査された遺跡で、A・B・C の 3 地区に分けて調査が行われ報告されている。A・B 地区からは貝殻文土器が出土しており、特に B 地区からは胸部に貝殻条痕、口唇部に貝殻腹縁文の尖底土器が出土している。草間教授は、岩手県で初めて復元された貝殻文の尖底土器であり、発見されたことは多大な成果であると報告している。ゴッソー遺跡では現（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下岩文振埋文に略称する）による平成 6 年度（1994）の発掘調査で、遺構には伴わないが日計式土器、魚骨回転文土器、寺の沢式土器等が出土している。中野城内遺跡は、三陸沿岸道路建設事業に伴い、岩文振埋文により平成 29 年度（2017）に調査が行われた。調査の結果、早期とみられる土坑、白浜式土器が出土している。

前期の遺跡として、ゴッソー遺跡（20）、上のマッカ遺跡（43）、北ノ沢Ⅰ遺跡（163）、小田ノ沢遺跡（200）などがある。ゴッソー遺跡は早期～晩期の縄文土器が出土しているが、前期初頭の遺物量が多く、特に平成 6 年度（1994）の岩文振埋文による本発掘調査で出土したコンバス文土器や押型文土器は岩手県で初めての出土と考えられる。同遺跡もやはり昭和 36 年（1961）に草間教授により発掘調査された遺跡で、縄文時代前期の土器を中心に縄文時代早期の土器、弥生時代の土器、土師器片、石器を採取したとの報告がある。なお、上のマッカ遺跡は昭和 36 年（1961）草間教授の調査により、貝塚が存在する可能性が指摘されている。

中期の遺跡として、千敷平遺跡（4）、ゴッソー遺跡（20）上のマッカ遺跡（43）、北ノ沢Ⅰ遺跡（163）などがある。平成 27 年度（2015）洋野町教育委員会によるゴッソー遺跡の本発掘調査では、中期初頭の堅穴住居跡が 1 軒発見され、三重の入れ子にした土器埋設炉と単体の土器埋設炉が並列した状態で検出された。その入れ子の土器埋設炉の中からヒエの胚乳が検出された。

後期の遺跡として、平内Ⅱ遺跡（65）、上水沢Ⅱ遺跡（92）、西平内Ⅰ遺跡（185）、南川尻遺跡（194）、サンニヤⅠ遺跡（195）、北鹿陳遺跡（196）、下向遺跡（202）、サンニヤⅢ遺跡（218）などがある。町内の縄文時代の

遺跡で、後期前葉に位置付けられる遺跡が一番多く、その中でも溝状土坑（陥し穴状遺構）と遺構外から後期前葉の土器が出土する遺跡が多数を占める。平内Ⅱ遺跡は洋野町教育委員会により、平成11年度（1999）から平成25年度（2013）の間、延べ6箇年発掘調査が行われた。屋外炉、集石、焼土遺構、溝状土坑が検出されており、出土した土器は主に後期前葉に位置付けられるものである。上水沢Ⅱ遺跡は平成12年度（2000）に岩文振埋文により本発掘調査が行われ、後期前葉から後葉の堅穴住居跡が11軒発見された。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴い発掘調査が行われた遺跡で、後期に属する堅穴住居跡が検出された遺跡は、西平内Ⅰ遺跡（185）、南川尻遺跡（194）、サンニヤⅠ遺跡（195）、北施株遺跡（196）、南施株Ⅰ遺跡（206）があり、南川尻遺跡は後葉、それ以外は前葉のものである。

晩期の遺跡として、たけの子遺跡（21）、大平遺跡（32）、ニサクドウ遺跡（58）、戸類家遺跡（61）、田ノ沢遺跡（63）などがある。特にたけの子遺跡は町内で晩期を代表する遺跡である。昭和36年度岩手県遺跡台帳作成調査において、戦争中開墾の際多数の土器が出土し、現在は植林されており包含層は良好で重要な遺跡であるとの報告がある。洋野町立種市歴史民俗資料館収蔵の考古資料の多くはこの遺跡からの出土である。戸類家遺跡は昭和32年（1957）に慶應大学江坂輝彌氏により発掘調査が行われており、土器、石器の他に土偶が出土している。この時の土偶は現在慶應義塾大学考古学研究室に収蔵されている。また、昭和7年（1932）には岩手県史跡名勝天然記念物調査会委員であった小田島禄郎氏が同町を訪れており、その時に採集された田ノ沢遺跡、八木貝塚の出土遺物が岩手県立博物館に収蔵されている。

なお、貝塚遺跡としてホックリ貝塚（33）、八木貝塚（37）、小字内貝塚（40）、黒マッカ貝塚（41）がある。ホックリ貝塚からは岩手県で初めて縄文時代の製塙土器が出土しており、久慈市の大芦Ⅰ遺跡で平成9年（1997）に発見されるまで、製塙土器が発見された県内唯一の遺跡であった。海岸付近に位置する同貝塚は、昭和24年（1949）に行われた造船所の建設工事によりほぼ壊滅したとみられるが、製塙遺跡であった可能性がある。洋野町の故玉沢重作氏により製塙土器が発見され、その後岡山大学名譽教授近藤義郎氏が、芹沢長介氏、伊東信雄氏、江坂輝彌氏から情報を得て昭和35年（1960）同遺跡を調査し、土器の検討を行っている。このほか縄文時代の製塙土器は、ゴッソー遺跡の平成12年度（2000）岩文振埋文による本発掘調査でコンテナ1箱分出土している。洋野町立種市歴史民俗資料館には、たけの子遺跡で採取された縄文時代の製塙土器片が多数収蔵されている。また、平成16年度（2004）の種市町内遺跡詳細分布調査において、南平内Ⅰ遺跡（182）より製塙土器片が晩期の縄文土器とともに発見された。同遺跡は現在の汀線まで約150mの距離であるが、時代によっては汀線付近であった可能性もある。遺跡の残存状況も良くないため詳細は不明であるが、位置から推測すると製塙を行った遺跡であることも考えられる。

弥生時代の遺跡として、大平遺跡（32）、大宮Ⅱ遺跡（47）、大宮Ⅰ遺跡（48）、平内Ⅱ遺跡（65）、上水沢Ⅱ遺跡（92）などがある。先述した平内Ⅱ遺跡では、平成25年度の調査で弥生時代前期後葉の堅穴住居跡が2軒検出されている。上水沢Ⅱ遺跡では弥生時代後期の堅穴住居跡が1軒検出され、土器がコンテナ約1箱分出土している。なお、西平内Ⅰ遺跡では、沈線間に交互刺突文を有する弥生時代後期の土器片が出土している。

古墳時代の遺跡については集落遺跡の確認はないが、袖山遺跡（38）において、剣形の石製模造品が表面採集されている。同品もまた故玉沢重作氏により発見されたもので、長さ4.2cm、最大幅1.5cm、厚さは最大で4mm、重さは3.6g、石材は北上山地が産出地の蛇紋岩で、色調は暗緑灰色である。茎の表現が簡略化された二等辺三角形に三角形を付加した形状で、全体が丁寧に研磨されて、頭部には垂下孔とみられる径2mmの穿孔があり、表面は鱗が表現されている。形状から5世紀後葉より古い可能性がある。袖山遺跡は標高約50mの海岸段丘上に立地し、現状は山林などで、主な時代は縄文時代であるが、石製模造品の他には当該期の遺物は発見されていない。昭和28年（1953）に東北大大学伊東信雄教授が東北地方の石製模造品の集成を行い発表した「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」により同品が紹介され知られるようになった。この石製模造品も岩手県で初めて

発見されたもので、昭和 58 年（1983）に一戸町馬場平遺跡から剣形の石製模造品が発見されるまで県内唯一のものであった。

奈良・平安時代の遺跡として、城内遺跡（11）、ニサクドウ遺跡（58）、八森遺跡（73）、サンニヤⅡ遺跡（205）、南鹿糞 1 遺跡（206）などがある。サンニヤⅡ遺跡では、三陸沿岸道路事業に伴い平成 26 年度（2014）・27 年度（2015）の岩手県教育委員会による発掘調査で、8 世紀後半から 9 世紀前半の時期の堅穴住居跡が 3 輪検出されている。また、国道 45 号線種市登坂車線整備事業に伴い、岩文振埋文により平成 28 年度（2016）に調査が行われた、八森遺跡でも 8 世紀代の堅穴住居跡が 1 輪検出されている。城内遺跡からは 8 世紀代と考えられる土師器の長胴壺、球胴壺、瓶、土師器壺が出土している。なお、草間教授の報告書によるとニサクドウ遺跡で土製支脚、土師器壺が出土している。

二十一平遺跡（69）では古代（平安時代）の製塩土器が出土している。同遺跡は岩手県と青森県境を流れる二十一川の南側の汀線付近に位置する。海岸整地に伴う重機の掘削により遺跡の存在が明らかになり、平成 15 年度（2003）に新規登録された。製塩土器片、土製支脚片が多量に散布し、被熱したような円融もみられた。現在までにコンテナで約 5 箱分が採取されている。遺跡の立地、発見された遺物の状況から製塩を行った可能性が高いが、保存状況は重機の掘削により一部破壊されていると考えられる。また、未登録の遺跡ではあるが、駒木野智寛氏、相原淳一氏による古津波堆積層の調査に伴い海岸付近で採集されている製塩土器もある。なお、古代の製塩土器は海岸から 6.2km の館野遺跡（207）でも採集されており、町内には縄文時代や古代の製塩土器、土製支脚を伴う遺跡が多く所在することが予想され、製塩遺跡の発見や製塩土器の資料の増加が見込まれる。

中世の遺跡として中世城館跡の分布調査が昭和 59 年（1984）に岩手県教育委員会により行われており、岩手県遺跡台帳には 28 遺跡が登録されているが、ほとんどが城主などの詳細が不明である。

種市の中内地区には種市氏の居城である種市城跡が所在する。種市氏は中世～近世初期に当地方を領有していた三戸南部氏（後の盛岡南部氏）の家臣である。「南部藩参考諸家系図」（以後系図）によれば、種市中務（実名不詳）が三戸南部氏 24 代晴政から種市村、蛇口村（経米町）ならびに傍村賜り種市村に居住したとある。およそ 16 世紀半ば頃と推測されるが、それ以前のことは不明である。「奥南旧指録」には、三戸南部氏 25 代晴繼の股肱の臣として中務が久慈懲前らと名を連ねておらず、三戸南部氏の有力家臣であったとみられる。系図によると、種市中務の長男光徳は同じく中務と称した。光徳は三戸南部氏 26 代信直（初代盛岡藩主）から種市村ならびに傍村に 600 石を賜ったとある。「聞老遺事」によると、天正 19 年（1591）九戸政実の乱の際、信直方に属し 18 人の部下と鉄砲三挺、弓三張で参陣している。また、2 代盛岡藩主利直の時に起きた慶長 5 年（1600）の岩崎合戦では、部下 18 人と参陣している。なお、系図には光徳の妻は根城南部氏（後の遠野南部氏）18 代八戸政栄の弟新田政盛の娘であることが記されている。

その後光徳の長男孫三郎が家督を継いだ。「聞老遺事」によれば大阪の夏の陣に出陣している。光徳と孫三郎父子は、初代盛岡藩主信直、2 代盛岡藩主利直父子に仕え活躍した家臣であったが、孫三郎は 3 代盛岡藩主重直の時、罪ありということで禄を没収され、慶安 2 年（1649）に没している。

光徳の次男吉広は系図によれば、天正 15 年（1587）に初代盛岡藩主信直から閉伊口村（久慈市）を賜り住んでいたが、天正 17 年（1589）に蛇口村に替地を賜り、蛇口氏に姓を変えている。

岩手県遺跡台帳には、平時居住していた平城の種市城跡（16）と非常に立てこもったとされる山城の種市城跡（17）が登録されている。平城の種市城跡は JR 八戸線種市駅より西へ約 9km に所在し、平城跡は現在でも馬場屋敷、的場、神楽屋敷など当時の名残と思われる地名が存在する。そこから南西へ約 1km に山城の種市城跡が位置する。

天正 18 年（1590）、豊臣秀吉の朱印状により初代盛岡藩主信直が「南部内七郡」を安堵されると、八戸・九戸地方一帯は信直が直接支配することとなり、寛永 4 年（1627）に根城南部氏が伊達氏に対する備えを理由に遠野

へ転封されると盛岡藩の直轄地になった。八戸には八戸城代が配置され、さらに八戸地方には八戸代官、九戸郡には久慈代官を派遣し支配にあたったようである。

寛文4年（1664）9月、3代盛岡藩主重直が跡継ぎを決めないままに死去した。同年11月、幕府は重直の次弟の重信と末弟の直房を呼び、盛岡藩10万石のうち8万石を重信に相続させ、残り2万石を直房に与え、新規に一藩をおこさせる処置を取った。寛文5年（1665）2月、盛岡藩より領地の配分が行われ、八戸を居城とし、三戸郡41箇村、九戸郡38箇村、志和郡4箇村、都合83箇村が付与された。八戸藩は、各村の支配のため通制という行政区画を用い、三戸郡には八戸郷・名久井通・長苗代通、九戸郡には経米通・久慈通、志和郡には志和の行政区を設定し、各通には代官所を配置した。種市は八戸郷、大野は久慈通に属していた。

八戸藩の主な産業は、商業、林業、漁業、製塩業、鉄産業、造船業などがあり、特に製鉄業は原料である砂鉄と燃料の薪炭材が豊富であったため盛んに行われた。製鉄に関する史料は八戸藩の藩庁の日記である目付所日記、勘定所日記、民間の史料では晴山家文書、酒沢家文書、西町屋（石橋）文書などがあり、様相を知ることができる。

製鉄の中心地は大野で、鉄山会所として日払所がおかれて、鉄山支配人が詰めて生産方を指揮した。天保9年（1838）には、大野の鉄山として玉川山、金取山、葛柄山、水沢山、大谷山、川井山、滝山の七山があった。晴山家文書の天保8年（1837）「寛政年中より拾書」は鉄山支配人の経緯が記されているが、晴山文史郎から安永7年（1778）に初代晴山吉三郎へ受け継がれ、その後数人の支配人を経て、享和2年（1802）からは飛驒の浜谷（星）茂八郎が引き継いだ。そして、文政6年（1823）には、鉄山は藩営となり、石橋徳右衛門が支配人に就任して、その下支配人に二代目晴山吉三郎が就いた。さらに天保5年（1834）の百姓一揆後は、軽米の酒沢円右衛門が支配人を命じられ、天保9年（1838）からは江戸の美濃屋宗（惣）三郎（家臣名金子丈右衛門）へと移った経過が記されている。

近世の遺跡として町指定史跡の有家台場（46）がある。目付所日記によると、八戸藩では幕府から異国船警戒の命を受けて、寛政3年（1791）に鉄砲堅・目付御用掛を任命し、異国船の警戒に当たらせたようである。寛政5年（1793）の中里覚右衛門書き上げの「堅場」には「大堅」として鮫村、牛生、「小堅」として八太郎浦、濱浦、小船渡浦、有家浦、中野浦の名があげられている。藩の日記などには異国船の出没記録がいくつかあるが、目付所日記によると文政8年（1825）有家浦の沖合15里に異国船一隻が近寄り、伝馬船二隻を出して上陸の様子をみせたので、弓・鉄砲衆など計34人の藩士が同日に派遣されたことが記されている。その後、安政元年（1854）八太郎・濱浦尻・館鼻・塙越・鮫・小船渡・有家・久慈湊に台場が築かれ、有家にも陣屋堅の役人が任命された。有家台場跡の現況は、八戸線の建設工事などで破壊されているものの、保存状況は概ね良好で、盛土遺構の一部が残存している。

当町の特徴を示す製鉄関連の遺跡は、21箇所（旧種市町16箇所、旧大野村5箇所）登録されている。先述した七山の一つである大谷鉄山（26）は大谷地区にあり、鉄山操業により形成された集落とみられ、製鉄に関わった人々の子孫が多く居住している。製鉄関連の遺跡調査については、岩手県教育委員会の製鉄関連遺跡の詳細分布調査において、旧種市町5箇所、旧大野村35箇所の遺跡の所在を確認している。また、元野田村教育長、田村栄一郎氏によるたたら遺跡の踏査によると、旧種市町は鉄山路12箇所の他、密鉄場跡や鍛冶場跡など15箇所、旧大野村は42箇所と鍛冶場跡の調査結果報告（1987『みちのくの砂鉄いまいずこ』）がある。鉄滓が採集される遺跡が少なくとも60箇所以上にのぼり、未発見のものも含めると相当数になると考えられる。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴う発掘調査において南八木遺跡（201）で古代～中世の製鉄関連の遺跡が発見された。少ながらず近世以前のものも所在することが予想されるが、町内の製鉄関連遺跡を踏査された佐々木清文によると、ほとんどが近世のもので、それ以前のものは所在しても少数であろうとのご教示をいただいている。今後製鉄関連の詳細な町内全域の分布調査を行い、製鉄関連遺跡分布図の作成、遺跡の登録作業が必要である。

製鉄以外の金・銀・銅・鉛鉱山のいわゆる非鉄鉱業については、八戸藩の日記類に僅かにみられるが、盛岡藩領に比べ八戸藩領内には大きな金山ではなく、小規模な金山がいくつかあるのみのようである。梅内家文書の慶安2年(1649)の「砂金採取運上金請取状」によると、沢尻、雪畠、小手沢、野そうけ山に金山があったことが記されている。岩手県遺跡台帳には金山跡として、小手野沢金山(14)、ノソウケ金山(23)の2遺跡が登録されている。

<引用・参考文献>

- 草間俊一 1963 「種市歴史(原始・中世)種市町諸遺跡の調査報告」種市町役場
- 角川書店 1985 「角川 日本地名辞典3 岩手県」
- 田村栄一郎 1987 「みちのくの砂鉄いまいすこ」
- 伊東信雄 1953 「東北地方に於ける石製櫻造品の分布とその意義」『歴史第6輯』東北史学会
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集
- 岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 2002 「上水沢II遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集
- (公財)岩手県文化振興事業団 2015 「平成26年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋II遺跡
- 沼袋Ⅲ遺跡 八幡沖遺跡 ほか調査概報(39遺跡) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集
- (公財)岩手県文化振興事業団 2016 「平成27年度発掘調査報告書 サンニヤ遺跡 房の沢IV遺跡 白石遺跡
- ほか調査概報(33遺跡) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2017 「西平内I遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集
- (公財)岩手県文化振興事業団 2017 「平成28年度発掘調査報告書 岩洞I遺跡・楊樹IV遺跡・八森遺跡
- ほか調査概報(28遺跡) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2018 「北虎株遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第686集
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2018 「サンニヤI遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第687集
- (公財)岩手県文化振興事業団 2018 「平成29年度発掘調査報告書 岩洞I・H遺跡 和野新聖神社遺跡 北野II遺跡
- 木戸塙遺跡 中野城内遺跡 沼里遺跡 楓井穴田IV遺跡 取耳I遺跡 千賀城遺跡 ほか調査概報(23遺跡)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集
- 岩手県教育委員会 1986 「岩手県中世城館分布調査報告書」 岩手県文化財調査報告書第82集
- 岩手県教育委員会 1998 「岩手の貝塚」 岩手県文化財調査報告書第102集
- 岩手県教育委員会 2006 「岩手の製鐵遺跡」 岩手県文化財調査報告書第122集
- 岩手県教育委員会 平成28年3月 「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成26年度 復興関係)」
- 岩手県文化財調査報告書第146集
- 岩手県教育委員会 平成29年3月 「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成27年度 復興関係)」
- 岩手県文化財調査報告書第149集

岩手県教育委員会 平成30年3月 「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成28年度 復興関係）」

岩手県文化財調査報告書第152集

岩手県種市町教育委員会 2004 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」種市町埋蔵文化財調査報告書第1集

岩手県種市町教育委員会 2005 「種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」種市町埋蔵文化財調査報告書第2集

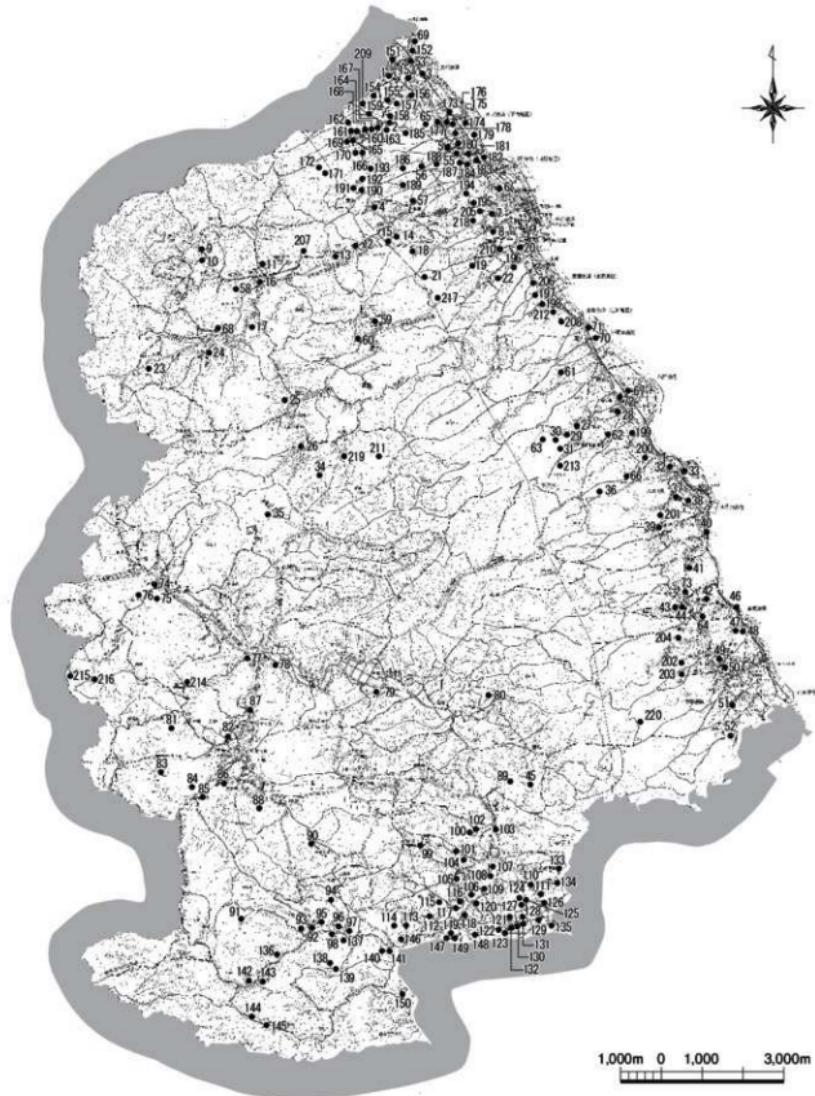
岩手県洋野町教育委員会 2013 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集

岩手県洋野町教育委員会 2015 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第2集

岩手県洋野町教育委員会 2017 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」洋野町埋蔵文化財調査報告書第3集

洋野町 2006 「種市町史第六巻通史編（上）」種市町史編さん委員会

大野村 2006 「大野村誌第二巻史料編」大野村誌編さん委員会



第3図 町内の遺跡位置図

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	備考
1	IPF37-1384	角山	かのじやま	橋本市第42地割	縄文	散布地	縄文土器	別記事2、範囲変更(平成23年度)
2	IPF37-2396	伝音I	でんきうちい	橋本市第43地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(草・前・後期)、洞片石器、縄石器、土師器等	別記事2、伝音遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)、範囲変更(平成25年度)
3	IPF38-3086	角川口I	かどかわのくち	橋本市第39地割	縄文	散布地	縄文土器(前・中・後期)、石斧、砾石、錐形器	別記事2、轟夷森(アメノ森)遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
4	IPF47-2334	千敷平	せんじきだいら	橋本市第48地割	縄文	集落跡	縄文土器(前・中・後期)、石棒、洞片	
5	IPF48-0170	平田I	ひらないひだ	橋本市第34地割	縄文	散布地	縄文土器(前・中・後期)、洞片	別記事2、平内遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
6	IPF48-1276	南熊	みなみくま	橋本市第28地割	中世	城郭跡	城郭跡(破壊)	昭和59年度調査
7	IPF48-2234	機手	よこて	橋本市第24地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(晚期)、土師器	範囲変更(平成23年度)
8	IPF48-2283	トの木	とちのき	橋本市第21地割	縄文	散布地	縄文土器(前・中・後期)	
9	IPF56-0330	荒巻	あらまき	橋本市第59地割	縄文、佐生	集落跡	縄文土器(中期)、佐生土器	
10	IPF56-0370	八幡堂館(八幡郷 夷館)	はちまんどうやうだ	橋本市第61地割	中世	城郭跡	平部、城跡	昭和59年度調査、八幡館より名前変更(平成13年度)
11	IPF57-0086	城内	じょうない	橋本市第56地割	縄文、古代	集落跡	上原長昌御殿、土塙登場	
12	IPF57-0229	荒尾敷館(轟夷館)	あらおしきだ	橋本市第50地割	中世	城郭跡	城郭跡(城壁)	昭和59年度調査
13	IPF57-0264	朝野館	あさのやかた	橋本市第50地割	中世	城郭跡	平路、堀跡、堅穴	昭和59年度調査
14	IPF57-0309	小手野沢金山	こてのわざきさん	橋本市第51地割	近世	砂丘採取跡	石垣	小手野金山より名称変更(平成13年度)
15	IPF57-0317	土無館	どなしだて	橋本市第51地割	中世	城郭跡	周濠跡、探査路	昭和59年度調査
16	IPF57-5023	種市城(平城)	たねいのじょう	橋本市第60地割	中世	城郭跡	城郭跡	昭和59年度調査
17	IPF57-5033	種市城(山城)	たねいちらじょう	橋本市第60地割	中世	城郭跡	城郭跡、平場	
18	IPF58-0034	小手野沢館	こてのわざきかた	橋本市第51地割	中世	城郭跡	周濠、平場	昭和59年度調査
19	IPF58-0169	楓樹館	いばらしじだ	橋本市第21地割	中世	城郭跡	平郭、城跡	昭和59年度調査
20	IPF58-0341	ゴツツー	ごつそー	橋本市第18地割	縄文	集落跡、野鼠跡	穴式住居跡、陷穴式遺構、徒上遺構、柱穴式土坑、土坑、縄文土器(早・中期)、製陶土器、佐生土器、石器	別記事5・事6、平成6年度・12年度・27年度本年度調査
21	IPF58-4006	たけの子	たけのこ	橋本市第21地割	縄文	散布地	縄文土器(後・晚期)、貝塚上器	
22	IPF58-4205	大久保	おおくぼ	橋本市第19地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(前・後・晚期)、石斧、土師器	
23	IPF66-4156	ノゾウケ金山	のそくけいさん	橋本市第20地割	近世	鉱業採取跡	石垣	
24	IPF66-4300	小手井館(タテツ コ)	こがようだ	橋本市第70地割	中世	城郭跡		昭和59年度調査
25	IPF67-1131	御座館	わざだて	橋本市第71地割	中世	城郭跡	平郭、城跡、平場	昭和59年度調査
26	IPF67-2146	大谷鉄山	おおやでつざん	橋本市第72地割	近世	鉱業開発地	鉱業開発地、鉄洋	八戸大野村鉄山
27	IPF69-3094	西の館	にしのやだ	橋本市第8地割	縄文、中世	城郭跡	城郭跡、城跡	縄文土器(後期)、石垣、平場
28	IPF69-1157	廻門館	しゆくのへだ	橋本市第7地割	中世	城郭跡	平郭、城跡、平場	昭和59年度調査
29	IPF69-2013	西の館	にしのやだ	橋本市第7地割	中世	城郭跡	上空、城跡、平場	昭和59年度調査
30	IPF69-2020	西船の宿	にしふねのしゆ	橋本市第7地割	縄文	散布地	縄文土器(晚期)、石器、土偶	
31	IPF69-2041	上野谷	かみのやのや	橋本市第7地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)	
32	IPF69-2380	大手	おおて	橋本市第3地割	縄文、佐生	集落跡	縄文土器(平・晚期)、佐生土器	
33	IPF69-2393	ホッカリ貝塚	ほっかりかいづか	橋本市第2地割	縄文、古代	貝塚	縄文土器、製塗土器、カキ、ミルクイ、土器	
34	IPF77-4201	柳沢鉄山	はそざわでつざん	橋本市第74地割	近世	鉱業開発地	鉄洋	
35	IPF77-4027	奥川鉄山	おくがわでつざん	橋本市第73地割	近世	鉱業開発地	鉄洋	
36	IPF79-0123	小田の沢鉄山	おだのわざわでつざん	橋本市第3地割	近世	鉱業開発地	鉄洋	
37	IPF79-0251	八木持屋	やぎかいづや	橋本市第1地割	縄文	貝塚	縄文土器(後期)、貝塚	
38	IPF79-0373	袖山	そでやま	橋本市第1地割	縄文、古墳	集落跡	縄文土器(中・後期)、石製模造品(古墳時代)	
39	IPF79-1245	長坂	ながさか	橋本市第1地割	縄文	散布地	縄文土器(後・晚期)	
40	IPF79-1358	子手内貝塚	こてないかいづか	橋本市第5地割	縄文	貝塚	染付磁器、陶片、ミルクイ、インダミ	
41	IPF79-2344	黒マッカ貝塚	くろまっかかいづか	有家第2地割	縄文、古代	貝塚	縄文土器(後期)、石器、土師器	
42	IPF89-0339	向戸門	むかひおりど	有家第3地割	縄文	集落跡	縄文土器(後期)、石斧	
43	IPF89-0340	上のマッカ	うえのまっか	有家第5地割	縄文	集落跡	縄文土器(前・後期)、石斧、洞片	範囲変更(平成23年度)
44	IPF89-0353	有薺館	うげだ	有家第5地割	中世	城郭跡	平郭、城跡(城壁)	昭和59年度調査、範囲変更(平成23年度)
45	IPF99-1153	芦毛鉄山	あしげわたりでつざん	中野第7地割	近世	鉱業開発地	鉄洋	
46	IG80-0056	有重台場	うぢだいば	有家第8地割	近世	街角跡	土器	昭和59年度調査

第1表 町内の遺跡一覧(1)

47	IG80-1006	大宮Ⅱ	おおみやに	中野第2地割	礎文、弥生 散布地	礎文土器(早期)、弥生土器	
48	IG80-1008	大宮Ⅰ	おおみやいち	中野第3地割	礎文、弥生 散布地	礎文(早・前・晚期)、石碑、弥生土器	
49	IG80-1063	長根塚	ながねづか	中野第3地割	礎文 散布地	礎文土器	
50	IG80-2004	中野館(熊塚・敷馬場)	なかのやか	中野第4地割	中世 城垣跡	單層、廻跡(埴塙)	昭和59年度調査
51	IG90-0005	般舟塚	ぼんづか	中野第11地割	礎文 散布地	礎文土器	昭和23年度
52	IG90-0085	番好沢	ばんじよざわ	中野第7地割	礎文 散布地	廻文土器(前・晚期)、石刀	別記申2、浜通道史から名称・般舟要變(平成23年度)
53	IF38-1072	アイヌ森	あいぬもり	樺市第29地割	礎文、弥生、 古代 散布地	礎文土器(前・晚期)、礎文晚期後樂 ～弥生前期の土器、石器、土師器	
54	欠番	-	-	-	-	-	北ノ沢跡登録抹消(範囲・名称変更のため)
55	IF48-0194	平内Ⅲ	ひらないさん	樺市第34地割	礎文 散布地	礎文土器(中期)、磐石	別記申2、般舟要變(平成23年度)
56	IF48-1025	石倉	いしくら	樺市第37地割	礎文、古代 散布地	礎文土器(後期)、砾石、稚器、土師器	別記申2、般舟要變(平成23年度)
57	IF48-2023	柳留	りつわり	樺市第30地割	礎文 散布地	石碑	
58	IF56-1358	ニサクウド	にさくうど	樺市第63地割	礎文、古代 散布地	礎文土器(晚期)、土師器、支脚	
59	IF57-2323	高取Ⅰ	たかとりい	樺市第21地割	礎文 散布地	礎文土器	
60	IF57-2229	高取Ⅱ	たかとりに	樺市第21地割	礎文 散布地	礎文土器(中・晚期)	
61	IF69-0042	牛軒家	へるけ	樺市第11地割	礎文 散布地	礎文土器(地盤)、土偶	
62	IF69-2113	向山	むかひやま	樺市第6地割	礎文 散布地	礎文土器	
63	IF68-2337	田ノ沢	たのさわ	樺市第7地割	礎文 散布地	礎文土器(地盤)	
64	IF89-0378	向長根	むかひながね	有家第8地割	礎文 散布地	礎文土器	
65	IF48-0017	平内Ⅱ	ひらないに	樺市第43地割 改営	散 風呂跡	聖穴住居跡、冠外枳、土坑、溝状遺構、 集石、溝跡、土器、埴塙、礎文土器(早 中期中葉末～後期前葉)、弥生土器(前 期後葉)、土製品、石器、石製品、 武具品、鎧管、錢貨	別記申1～4号、平成11～13年度・23 ～25年度発掘調査、昭和変更(平 成23年度)
66	IF79-0119	大沢	おおはざ	樺市第3地割	礎文 散布地	礎文土器, 石器	
67	IF69-1109	船	ふな	樺市第2地割	礎文 散布地	礎文土器(中期)	
68	IF56-2350	大沢	おおさわ	樺市第66地割	礎文 散布地	礎文土器	平成13年度新規発見
69	IF38-0098	二十一平	にじゅういちひら	樺市第41地割	古代 散布地	銅塙遺跡 銅塙土器、土質支脚、土師器	別記申2、平成15年度新規発見、昭 和変更(平成23年度)
70	IF59-2161	玉川Ⅰ	たまがわい	樺市第13地割	礎文 散布地	礎文土器(早期)	
71	IF59-2038	玉川Ⅱ	たまがわに	樺市第14地割	礎文 散布地	礎文土器(前期)	
72	IF69-1126	馬場	ばば	樺市第7地割	礎文 散布地	礎文土器	平成16年度新規発見、昭和変更(平 成23年度)
73	IF89-0314	八森	はちもり	有家第3地割	礎文、奈良 散布地	聖穴住居跡、礎文土器、石器、土師器	別記申11、平成16年度新規発見、昭 和変更(平成23年度)、平成26年度 半発掘調査
74	IF86-0118	向田Ⅱ	むかひに	大野第20地割	礎文 散布地	礎文土器	
75	IF86-0137	向田	むかひだ	大野第23地割	礎文 散布地	礎文土器(後期)、石器	
76	IF86-0144	向田Ⅰ	むかひいち	大野第20地割	礎文 散布地	礎文土器(後期)、石器	
77	IF87-1082	明月瓶	めいげい	大野第29地割	中世 城垣跡	單孔、土壘、廻跡、平場	昭和59年度調査
78	IF87-2100	森の渡	もりのわたり	大野第36地割	近世 鉄筋開削	鐵	
79	IF87-2366	洪山田(般舟塚)	さわやまだ	大野第49地割	中世 城垣跡	廻跡、單孔	昭和59年度調査
80	IF88-2284	牛軒ばし林組	うしこばしろばしやしだて	大野第55地割	中世 城垣跡	廻跡、平場	昭和59年度調査
81	IF96-0272	たてひら船	たてひらやかた	大野第13地割	中世 城垣跡	廻跡、廻跡、平場	昭和59年度調査
82	IF96-0387	長根	ながね	大野第27地割	礎文 散布地	礎文土器(後期)、石器	
83	IF96-1280	帆舟森島	ふぞもりじま	大野第10地割	中世 城垣跡	廻跡、廻跡、平場	昭和59年度調査
84	IF96-2238	拂櫛岸Ⅱ	よこぎざわせに	大野第4地割	礎文 散布地	石器、甕	
85	IF96-2249	拂櫛岸Ⅰ	よこぎざわせら	大野第5地割	礎文 散布地	甕、石器	
86	IF96-2316	大野館	おおのやかた	大野第5地割	中世 城垣跡	平場	
87	IF97-0012	ひととっこ窓	ひととっこごた	大野第6地割	中世 城垣跡	單層、廻跡、平場、聖穴	昭和59年度調査
88	IF97-2055	金ヶ沢	かながわ	大野第59地割	礎文 散布地	礎文土器(前期)	
89	IF98-1299	阿子木塚	あこぎだ	阿子木第4地割	中世 城垣跡	單孔、廻跡、聖穴	昭和59年度調査
90	IF07-0168	高森Ⅱ	たかもりに	大野第57地割	礎文 散布地	礎文土器	
91	IF07-2061	上水沢Ⅰ	かみみずさわいち	上水沢第3地割	礎文 散布地	礎文土器	
92	IF07-2188	上水沢Ⅱ	かみみずさわに	上水沢第2地割	礎文、弥生 散布地	礎文土器(早・後期)、弥生土器、土製 品、石器、アスファルト塊、鐵製品、鐵 銅製品、廻跡(近・現代)	別記申7、平成12年度半発掘調査
93	IF07-2196	上水沢Ⅲ	かみみずさわさん	上水沢第3地割	礎文 散布地	礎文土器	
94	IF07-2204	高森Ⅰ	たかもりい	上水沢第2地割	礎文 散布地	礎文土器	
95	IF07-2272	上水沢Ⅳ	かみみずさわよん	上水沢第2地割	礎文 散布地	礎文土器	

第1表 町内の遺跡一覧(2)

96	JF07-2275	上水沢V(廻転型)	かみみすざわご	水沢第7地割	中世	城郭跡	甲郡	昭和59年度調査
97	JF07-2286	下水沢I	しもみすざわい	水沢第8地割	礎文	散布地	酒片	
98	JF07-2294	上水沢Ⅱ	かみみすざわわく	水沢第9地割	礎文	散布地	岡文土器	
99	JF08-0067	堀内	つつみない	大野第57地割	礎文	散布地	岡文土器	
100	JF08-0129	日向1	ひなむら	大野第57地割	古代	散布地	土器群	
101	JF08-0186	下西島I	しもむらしまい	帶島第11地割	礎文	散布地	岡文土器	
102	JF08-0224	日向II	ひなむに	阿子木第9地割	礎文	散布地	岡文土器	
103	JF08-0225	阿子木	あこぎ	阿子木第12地割	礎文	散布地	岡文土器	
104	JF08-1108	下島崎II	しもじまきまに	帶島第11地割	礎文	散布地	岡文土器	
105	JF08-1156	鶴鳴I	えりのいでいか	帶島第5地割	中世	城郭跡	平塙、堅跡	昭和59年度調査
106	JF08-1199	上帯島I	かみひたしまい	帶島第8地割	礎文	散布地	岡文土器	
107	JF08-1225	二屋	ふたや	阿子木第18地割	礎文	散布地	岡文土器	
108	JF08-1254	下帯島Ⅲ	しもひたしまさん	阿子木第18地割	古代	散布地	上御跡	
109	JF08-1372	下帯島Ⅳ	しもひたしまん	帶島第9地割	礎文	散布地	岡文土器	
110	JF08-1375	二屋Ⅱ	ふたやむかひ	阿子木第12地割	礎文	散布地	岡文土器	
111	JF08-1396	長嶺森I	ちょうづかもりい	阿子木第12地割	礎文	散布地	岡文土器	
112	JF08-2059	高森Ⅱ	たかもりさん	帶島第4地割	礎文	散布地	岡文土器	
113	JF08-2073	大西IV	おおむらさん	帶島第1地割	礎文	散布地	岡文土器	
114	JF08-2081	大西V(廻転型)	おおむらご	帶島第1地割	中世	城郭跡か?	半跡、堅跡	
115	JF08-2111	鶴鳴I	えりのいでいか	帶島第4地割	中世	城郭跡	半跡、堅跡	昭和59年度調査
116	JF08-2117	閑田I	せきむら	帶島第7地割	礎文	散布地	岡文土器	
117	JF08-2127	閑田II	せきむらに	帶島第7地割	礎文	散布地	岡文土器	
118	JF08-2144	上島崎II	かみじまきに	帶島第7地割	礎文	散布地	岡文土器	
119	JF08-2194	上島崎III	かみじまきまに	帶島第7地割	礎文	散布地	岡文土器	
120	JF08-2211	上島崎Ⅳ	かみじまきまん	帶島第7地割	礎文	散布地	岡文土器	
121	JF08-2269	赤堀I	いやさかいろ	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
122	JF08-2287	赤堀Ⅱ	いやさかさん	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
123	JF08-2289	赤堀Ⅲ	いやさかさん	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
124	JF08-2301	赤堀V	いやさかご	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
125	JF08-2304	赤堀Ⅵ	いやさかごく	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
126	JF08-2318	長嶺森Ⅲ	ちょうづかもり	阿子木第12地割	礎文	散布地	岡文土器(後期)、審	
127	JF08-2323	赤堀Ⅶ	いやさかかな	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
128	JF08-2353	赤堀Ⅷ	いやさかはち	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
129	JF08-2357	赤堀Ⅸ	いやさかはう	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
130	JF08-2371	赤堀X	いやさかじう	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
131	JF08-2373	赤堀XI	いやさかじゅう	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
132	JF08-2380	赤堀XII	いやさかじゅうに	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
133	JF09-0022	長嶺森Ⅲ	ちょうづかもり	阿子木第12地	礎文	散布地	石塚	
134	JF09-1051	長嶺森Ⅳ	ちょうづかもりよ	阿子木第12地	礎文	散布地	岡文土器	
135	JF09-2071	赤堀II	いやさかに	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	
136	JF17-0140	上水沢Ⅳ	かみみすざわな	水沢第3地割	礎文	散布地	岡文土器(後期)	
137	JF17-0216	下水沢Ⅲ	しもみすざわに	水沢第9地割	礎文	散布地	岡文土器	
138	JF17-0256	金岡屋I	かなまぶに	水沢第12地割	近世	製鉄関連	築の羽1、既洋	
139	JF17-0297	金岡屋Ⅱ	かなまぶに	水沢第12地割	礎文、古代、近世	散布地	岡文土器、土器群、寛永通宝	
140	JF17-0337	大西I	おおむらい	水沢第10地割	礎文	散布地	岡文土器	
141	JF17-0339	大西II	おおむらに	水沢第10地割	礎文	散布地	岡文土器	
142	JF17-0422	牛平I	おおひらひら	水沢第2地割	礎文	散布地	岡文土器	
143	JF17-0424	牛平II	おおひらひら	水沢第2地割	礎文、古代、近世	散布地	岡文土器	
144	JF17-2003	青森櫻Ⅰ	あおのはなに	水沢第14地割	礎文	散布地	岡文土器(後期)	
145	JF17-2027	青森櫻	あおのはな	水沢第13地割	礎文	散布地	岡文土器、右脇	
146	JF18-0002	大西Ⅲ	おおむらさん	帶島第2地割	礎文	散布地	岡文土器	
147	JF18-0103	帶島開拓地I	たいしまかいたく	帶島第7地割	礎文	散布地	岡文土器	
148	JF18-0108	帶島開拓地II	たいしまかいたく	赤堀	礎文	散布地	岡文土器	

第1表 町内の遺跡一覧(3)

第1表 町内の遺跡一覧(4)

196	IP58-0286	北平難	きたかみか	種市第1地割	縄文	集落跡、斜面居跡、階上式住居跡、階下式住居跡、土坑、陶器、石器	別記番12、平成25年度新規発見、平成27年度・28年度本発掘調査
197	IP58-354	鬼難浜Ⅲ	かねいはまに	種市第15地割	縄文	散布地	縄文土器、石器
198	IP58-1299	鬼難浜Ⅰ	かねいはまいか	種市第15地割	縄文	散布地	縄文土器、石器
199	IP69-1199	鬼難浜Ⅱ	しめいはまいか	種市第6地割	縄文	散布地	縄文土器、石器
200	IP69-2273	小川ノ沢	こがのさわ	種市第3地割	縄文	散布地	石器
201	IP79-1217	南八木	みなみやぎ	種市第1地割	平安	駿賀開港	鉄斧
202	IP89-1394	下河	しもむかい	中野第1地割	縄文、弥生	井戸場跡	縄文土器、土坑、陶器、土器、石器
203	IP89-2323	中野城内	なかのじょうない	中野第1地割	縄文	斜面場跡	階上式住居跡、土坑、土器、石器
204	IP89-1327	鬼瀬	くろさか	有家第9地割	縄文	集落跡	階上式住居跡
205	IP48-2231	サンニヤⅢ	さんにやに	種市第25地割	縄文、古代	鬼瀬跡	階上式住居跡、土坑、階下式住居跡、土器、石器
206	IP58-1333	鬼瀬町Ⅰ	みなみかみかいち	種市第16・17地割	縄文	集落跡	堅苦住居跡、溝跡、土坑、階下式住居跡、土器、石器
207	IP57-0174	越野	たのの	種市第53地割	古代	散布地、駿賀開港	駿賀土器(古代)、鉄斧
208	IP59-2021	北至川	きたたまがわ	種市第14地割	縄文	散布地	縄文土器
209	IP37-2343	田ノ瀬Ⅱ	たののはたに	種市第44地割	縄文	井戸場跡、散布地	階上式住居跡、縄文土器、フレイク
210	IP58-0245	鬼瀬内	あらつない	種市第20地割	縄文	井戸場跡、階下式住居跡	階上式住居跡、土器、土器片
211	IP67-2355	松沢Ⅰ	まつがさわいか	種市第73地割	縄文	散布地	土器、石器
212	IP58-2312	鬼瀬浜Ⅲ	かねいはまさん	種市第15地割	縄文	散布地	階上式住居跡
213	IP79-0011	祇石	づしき	種市第4地割	縄文	散布地	縄文土器、石器
214	IP86-2265	新洞	しんどう	大野第14地割	近世	駿賀開港	鉄斧
215	IP85-2335	一本松Ⅱ	いっぽんまつむかいか	大野第15地割	縄文、古代	散布地、駿賀開港	駿文土器、土器片、鉄斧
216	IP86-2053	一本松Ⅳ	いっぽんまつむかいか	大野第15地割	縄文、近世	散布地、駿賀開港	縄文土器、土器片、鉄斧
217	IP58-1470	祇横	いたばし	種市第21地割	縄文	井戸場跡	階上式住居跡
218	IP48-2250	サンニヤⅢ	さんにやさん	種市第25地割	縄文	井戸場跡	階上式住居跡、縄文土器、石器
219	IP67-2265	松ノ沢Ⅱ	まつがさわに	種市第74地割	不明	駿賀開港	鉄斧
220	IP99-0251	下河Ⅱ	しもむかいに	中野第1地割	縄文	井戸場跡	階上式住居跡、土坑

〈備考欄の文献について、それぞれ次のように略した〉

- 「別記番1」 岩手県種市町教育委員会 2004「平内II道跡発掘調査報告書」 種市町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 「別記番2」 岩手県種市町教育委員会 2005「種市町内道路詳細分布調査報告書Ⅰ」 種市町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 「別記番3」 岩手県洋野町教育委員会 2013「平内II道跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 「別記番4」 岩手県洋野町教育委員会 2015「平内II道跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 「別記番5」 岩手県洋野町教育委員会 2016「ゴゾー道跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 「別記番6」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996~2000「ゴゾー道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集、第357集
- 「別記番7」 岩手県久慈郡方根振易農村整備事務所(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002「上水沢Ⅱ道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集
- 「別記番8」 (公財) 岩手県文化振興事業団 2015「平成26年度発掘調査報告書」 南川尻道路、下向道跡、沼袋Ⅰ道跡、沼袋Ⅱ道跡 はか调查概報33(道路) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集
- 「別記番9」 (公財) 岩手県文化振興事業団 2016「平成27年度発掘調査報告書」 サンニヤⅠ道跡、河の沢跡、白石道路 はか调查概報33(道路) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集
- 「別記番10」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団 2017「西平内I道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集
- 「別記番11」 (公財) 岩手県文化振興事業団 2017「平成28年度発掘調査報告書」 岩洞湖Ⅰ道跡、柄羽原Ⅱ道跡、八森道路 はか调查概報33(道路) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集
- 「別記番12」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団 2018「北鹿瀬道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第686集
- 「別記番13」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団 2018「サンニヤⅠ道跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第687集
- 「別記番14」 (公財) 岩手県文化振興事業団 2018「平成29年度発掘調査報告書」 岩洞湖Ⅰ・H道跡、相野新懸社道路、北野延道路、木戸山道跡 中野町内道跡、沼里田道跡、根井沢穴田Ⅳ道跡、耳取Ⅰ道跡、千賀城道跡 はか调查概報33(道路) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集
- 「別記番15」 岩手県教育委員会 平成28年3月「岩手県内道跡発掘調査報告書(平成26年度復興開削)」 岩手県文化財調査報告書第146集
- 「別記番16」 岩手県教育委員会 平成29年3月「岩手県内道跡発掘調査報告書(平成27年度復興開削)」 岩手県文化財調査報告書第149集
- 「別記番17」 岩手県教育委員会 平成30年3月「岩手県内道跡発掘調査報告書(平成28年度復興開削)」 岩手県文化財調査報告書第152集

第1表 町内の遺跡一覧(5)

IV. 遺跡の地形と地質

日本地質学会会員 松山 力

1. 地学的環境概要

下向Ⅱ遺跡は、洋野町東南部のJR八戸線「りくちゅうなかの駅（東方の太平洋岸から約120～130m）」の西南西方3.7km地点の周囲に立地する遺跡である。

遺跡の北方には、西方から東北東に下り、北方約1km付近を屈曲しながら北東方に流れる有家川と、南方には約2km付近を東に下り、途中から向きを北東に変えて屈曲して流れる高家川があって、最下流部は久慈市との町境となっている。

河川の間は、東北東に高度を低めながら、北北西から南南東に続く丘陵地の一部で、そのうちの両川に挟まれた丘陵地のうち、海拔高度140～200m部分の起伏は緩やかで、両川の谷壁を除けば、内部をほぼ東北東方に流れる2小川の谷壁も大部分が未発達で、急斜面は少なく、縄文時代以降の人々にとって、伸びやかな生活の適地であったと思われる。

遺跡はこの丘陵地の西縁にある標高200mの平坦面の北に下る平頂丘陵地にある。

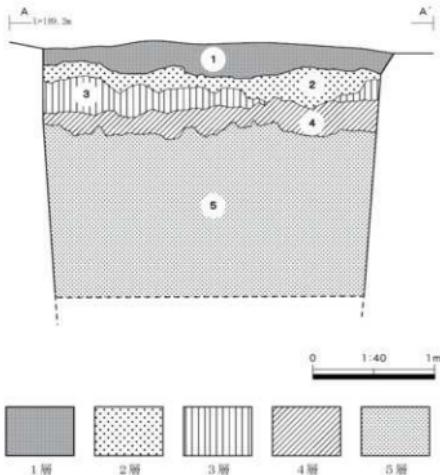
この地域の地質基盤は、中生代前期白亜紀に形成されたとされる花崗閃緑岩で、各種報告では、その上を第四紀更新世以降の火山灰層や軽石層が覆うとされている。

2. 遺跡の土・地質

調査では、より古い時期の遺構・遺物の存在可能性の確認を兼ねて、2カ所の深掘りが行われたが、両箇所の比較の結果、土層序に格別の相違が認められなかったので、より鮮明な一箇所に限って土層序の詳細な観察を行い、土層を上から順に5層に区分し、土層の断面図を作成した。第4図がそれである。

1層は、厚さ10～27cmの表土に相当する砂質暗褐色(10YR3/3)土層で、植生の毛根が密集している。軽石その他の混合物はほとんど認められなかった。

2層は、厚さ5～32cmの暗褐色(10YR3/4)砂質土層である。砂粒の粒径はほぼ1～2mmであるが、最大4mmの風化細礫や粒径最大10mmまでの明黄褐色(10YR7/6)の軽石粒が散らばっている。



第4図 深掘1土層序

3層は、厚さ0～30cmのにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土層である。ややしまった土層で、長径4～7cm（最大12cm）の褐色（10YR4/4）砂質土塊が混じり合っている。

4層は、厚さ9～28cmの黄褐色（10YR5/6）砂質土層であるが、土層中に軽石混じり火山灰塊が断続している。火山灰塊はにぶい黄褐色（10YR6/4）で最大長径（横長）26cm、十和田八戸火山灰に相当する。その他、火山灰断続の間々に、横長が最大56cmの褐色（10YR4/6）土層が挟まれ、その中には、長径数～35mmの黄橙色（75YR7/8～10YR7/8）火山灰塊が散らばっている。

5層は、十和田八戸火山灰の降下直前までの地表直下（そこまでの人々の生活面下）に相当する土層である。厚さが137cm以上の砂質粘土質シルト層である。上限部は厚さ0～22cmの灰黄褐色（10YR6/2）土層で、上辺が炭質物を含んで黒みを帯びた風化帯となっている。その下方は、色調が、にぶい褐色（10YR6/2）土層から下方へ、黄褐色（10YR6/4）土層となり、さらににぶい黄褐色（10YR5/4）土層へと変化している。

5層については、粒度が水成あるいは風成で淘汰された痕跡がなく、無層理塊状で均質の層相を呈していて、下位の閃綠岩体との関係を確認できなかった。当初、十和田八戸火山灰層の下位には、十和田火山起源の火山碎屑物層を挟む、いわゆるローム層の存在を予想していたが、今後の周辺域を含めた精査による確認を、痛感させられた。

主な引用・参考文献と付言

大池昭二・七崎修・松山力、1970、八戸平原地区地質調査報告書、東北農政局

松山力・大池昭二、1986、十和田火山噴出物と火山活動、十和田科学博物館、4号

V. 下向II遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県洋野町中野地区に所在する下向II遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代のTビット、土坑などが検出されている。

本分析調査では、縄文時代の貯蔵穴の可能性が指摘されている土坑内堆積物を対象とし、内容物や周辺の植生(特にイネ科)に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析を実施する。

また、調査区に設定された深掘りトレンチの基本土層中に確認された、炭化材が散在し、やや暗色を呈する土層を対象として、花粉分析、植物珪酸体分析、放射性炭素年代測定を実施し、堆積物の年代や当該期の植生などを推定する。

さらに、調査区内に設定された深掘りトレンチのうち、黒ボク土からロームまでが確認されている基本土層の層序を対象として、テフラ分析（テフラ検出同定、重鉱物・火山ガラス比、屈折率測定）を行い堆積物中のテフラについてのデータを作成した上で、既知のテフラとの対比を行い、層序に関する情報を得る。

以下に分析対象試料、分析方法、結果、考察の順に述べる。

1. 試料

試料は弊社技師1名が、2019年4月18日に発掘調査現場に赴き採取した。Tビット1基、土坑2基、深掘りトレンチで観察される基本層序1箇所を対象として試料採取を実施した。Tビット、土坑については堆積物の観察を行い、観察に基づき分層された各層より試料を採取した。

Tビット(TP-1)では各層で4点の試料を採取した。

土坑SK-1、SK-2からはそれぞれ4点の試料を採取した。

基本層序は観察および分層の結果から、黒ボク土層については5cm連続で、1～15の計15点の試料を採取した。ローム層については分層された各層から16～22の7点の試料を採取した。また、ローム層中の18および19を採取した層付近には、炭化材の集中が確認された。観察された炭化材のうち、大きく状態の良好なものについて、CW1～CW7の計7点を採取した。

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、深掘1断面中部に認められた暗色化した層位に散在する炭化材から採取された炭化材片6点である。採取位置を図1に示す。測定は、これらを一括して試料1点として行う。

(2) 花粉分析

花粉分析の試料は、深掘1より採取された試料番号18の計1点である。上述した炭化材片の散在する層位である。

(3) 植物珪酸体分析

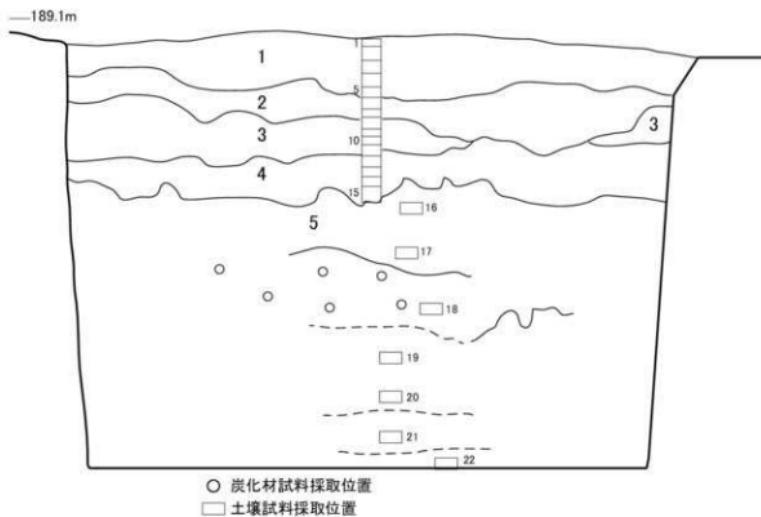
土坑の試料として、SK-1の最下層（試料番号3）が選択された。また、比較試料として深掘1から採取された花粉分析と同一の土壤試料（試料番号18）が選択された。

(4) テフラ分析

層序対比のための試料は、深掘1、TP-1W、SK-1の3箇所の断面から採取された。

・深掘1

試料は、6、8、10、12、14、16、18、19、21、22の10点を対象とした。試料採取層位を第5図に示す。断面



第5図 深掘1断面試料採取位置

の層相から、1層と2層は黒ボク土層、3層は漸移層、4層はローム層最上部に相当する。

・TP-1W

試料は、試料番号4の1点である。

・SK-1

試料は、試料番号3の1点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。今回の試料は脆弱で、かつ分析量が少ないため、十分な炭素を回収するため、アルカリの濃度を薄く(0.05mol/L)して試料の損耗を防ぐ(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。今回は、 ^{14}C 濃度が 1950 年よりも高いため、 F^{14}C の値を記し、この値を用いて曆年校正を行う。曆年校正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk 2009) を用いる。校正曲線は北半球中緯度地域の 1950 年以降の ^{14}C 濃度を示すデーターセット NHZ2 (Hua et al. 2013) を用いる。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、ブッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉（1973）、中村（1980）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。

(4) テフラ分析

・テフラの検出同定

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

・重鉱物火山ガラス比

試料より約 40g を採取し、水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250 メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が 1/16mm より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径 1/4mm/1/8mm の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉱物分については、火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の 3 つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高

まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

・屈折率測定

さらに火山ガラスおよび斜方輝石については、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を第2表、第6図に示す。前処理は、試料の量が少なく、かつ脆弱であったため、アルカリ処理を定法の五分の一（0.05mol/L）で行っている。グラファイトは、年代測定を行うのに十分な量が回収されている。今回の測定結果は、 40186 ± 240 BPである。

曆年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、曆年代に近づける手法である。測定誤差 2σ の曆年代は、44341～43255 calBPである。

（2）花粉分析

結果を第3表に示す。深掘1の試料番号18は分析残渣が非常に少なく、含まれる花粉化石も非常に少ない。わずかに認められた花粉化石は、木本花粉のモミ属、マツ属、スギ属、クリ属、シイ属、ニレ属—ケヤキ属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科のみである。なお、保存状態は普通程度であった。

（3）植物珪酸体分析

結果を第4表に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また検出個数と分類群も少ない。

SK-1の試料番号3および比較試料とした深掘1の試料番号18では、いずれもクマザサ属を含むタケア科やイチゴツナギア科、分類群が明確にならない不明が100個/g未満～300個/g程度の含量である。

（4）テフラ分析

テフラ分析の結果を第5表に、重鉱物火山ガラス分析結果を第6表および第7図に示し、火山ガラスの屈折率測定結果を第8図に、斜方輝石の屈折率測定結果を第9図に示す。以下に各地点のテフラ分析結果と各試料の火山ガラスの屈折率について述べる。

・深掘1

スコリアは試料番号22からのみ検出されている。スコリアは、最大径約0.6mm、黒色で発泡不良のスコリアが多く、他に黒色で発泡や不良、灰黒色で発泡や不良などのスコリアも混在する。

火山ガラスは、すべての試料から検出されているが、試料によって量比が異なる。火山ガラスは、試料番号6～12、16、19～22は、無色透明の軽石型およびバブル型が微量～きわめて微量含まれる。試料番号14は無色透明の軽石型およびバブル型が多量含まれる。試料番号18は、無色透明の軽石型およびバブル型が中量含まれる。

軽石は、試料番号6、8、10、14から検出されている。試料番号14には多量、試料番号10には少量、試料番号6、8、12は微量含まれる。試料番号14の軽石は最大粒径3.0mmという粗粒の軽石であり、色調は白色を呈し、発泡はやや良好なものが多く、次いで良好のものが多く、やや不良のものも混在する。試料番号10の軽石は最大粒径2.0mmであり、色調は白色を呈し、発泡や良好～良好のものが混在する。試料番号6、8、12は、白色で発泡や不良で、発泡良好の軽石が微量混在する。いずれの試料の軽石も、斜方輝石または角閃石の斑晶を包有する。

・TP-1W

試料番号4からは、スコリアは認められなかった。火山ガラスは、無色透明の軽石型およびバブル型が微量含

まれる。軽石は、中量含まれ、最大粒径 1.5mm であり、色調は白色を呈し、発泡や良好のものを主体とし、良好のものが混在する。斜方輝石または角閃石の斑晶を包有する。

・SK-1

試料番号 3 からは、スコリアは認められなかった。火山ガラスは、無色透明の軽石型およびバブル型が微量含まれる。軽石は、少量含まれ、最大粒径 1.1mm であり、色調は白色を呈し、発泡や良好のものを主体とし、良好のものが混在する。斜方輝石または角閃石の斑晶を包有する。

試料名	種別/性状	処理法	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	年代値 (BP)		確率%	Code No.
W7	炭化材	0.05mol/L (AaA)	-25.7976 ± 0.39	44341	-	43255	95.4 pal-12154 25627-1

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

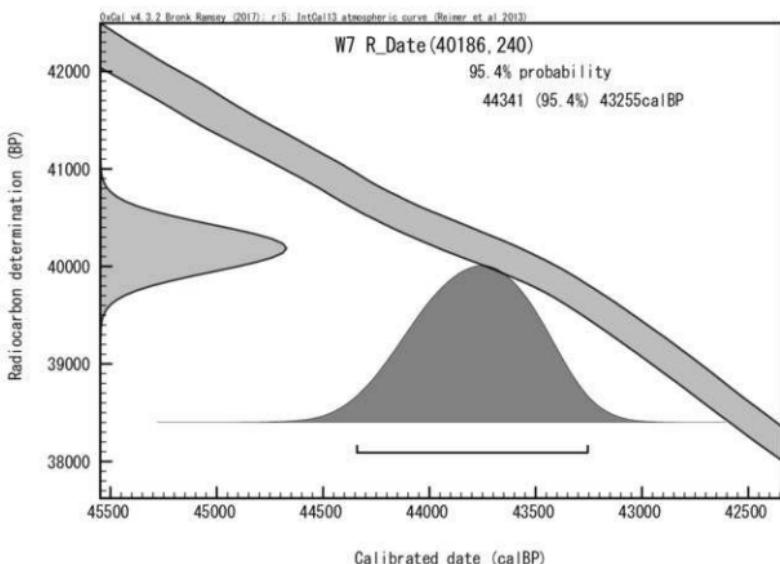
2)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3)AaAは、アルカリの濃度を薄くした処理を示す。

4)曆年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用

5)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である

第2表 放射性炭素年代測定結果



第6図 放射性炭素年代測定結果

種類	深掘1 18
木本花粉	
モミ属	1
マツ属	1
スギ属	1
クリ属	7
シイ属	2
ニレ属—ケヤキ属	2
草本花粉	
イネ科	1
カヤツリグサ科	1
シダ類胞子	
シダ類胞子	7
合計	
木本花粉	14
草本花粉	2
シダ類胞子	7
合計	23

第3表 花粉分析結果

分類群	(個/g)	
	深掘1 18	SK-1 3
イネ科葉部短細胞珪酸体		
クマザサ属	100	100
タケ亜科	<100	<100
イチゴツナギ亜科	<100	<100
不明	<100	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
クマザサ属	100	200
タケ亜科	200	200
不明	300	200
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	400	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	600	500
植物珪酸体含量	1,000	800

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100: 100個/g未満

第4表 植物珪酸体含量

層名	試料番号	スコリア			火山ガラス			軽石			備考
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径		
深掘1	6	-			+	cl·pm>cl·bw	+	W·sg~W·g	1.4		
深掘1	8	-			+	cl·pm>cl·bw	+	W·sg~W·g>W·b	1.3		
深掘1	10	-			+	cl·pm>cl·bw	++	W·sg~W·g	2.0		
深掘1	12	-			(+)	cl·pm>cl·bw	+	W·sg	1.4		
深掘1	14	-			++++	cl·pm>cl·bw	++++	W·sg~W·g>W·b	3.0		
深掘1	16	-			+	cl·pm>cl·bw	-				
深掘1	18	-			+++	cl·pm>cl·bw	-				
深掘1	19	-			(+)	cl·pm, cl·bw	-				
深掘1	21	-			(+)	cl·pm, cl·bw	-				
深掘1	22	++	B·b>B·sb>GB·sb	0.6	(+)	cl·pm, cl·bw	-				
TP-IW	4	-			+++	cl·pm>cl·bw	+	W·sg~W·g	1.5		
SK-1	3	-			++	cl·pm>cl·bw	+	W·sg~W·g	1.1		

凡例 -:含まれない、(+):きわめて微量、+:微量、++:少量、+++:中量、++++:多量。

B:黒色、GB:灰黒色。

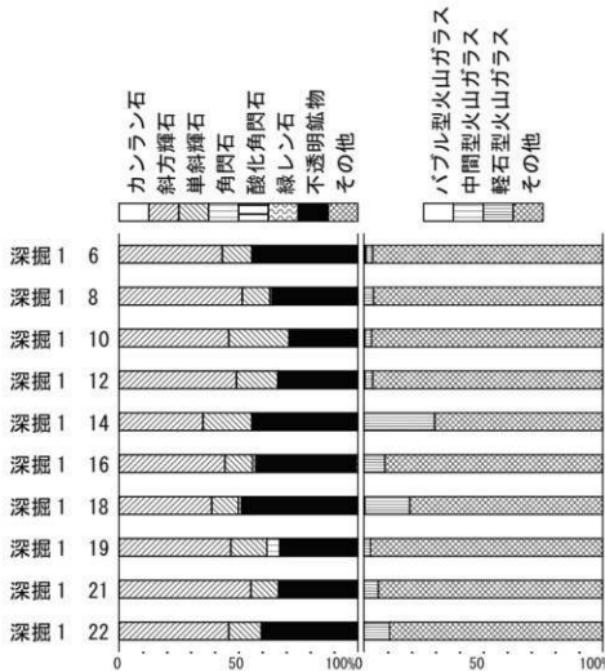
g:良好、sg:やや良好、Sb:やや不良、b:不良。最大粒径はmm。

cl:無色透明、bw:バブル型、pm:軽石型。

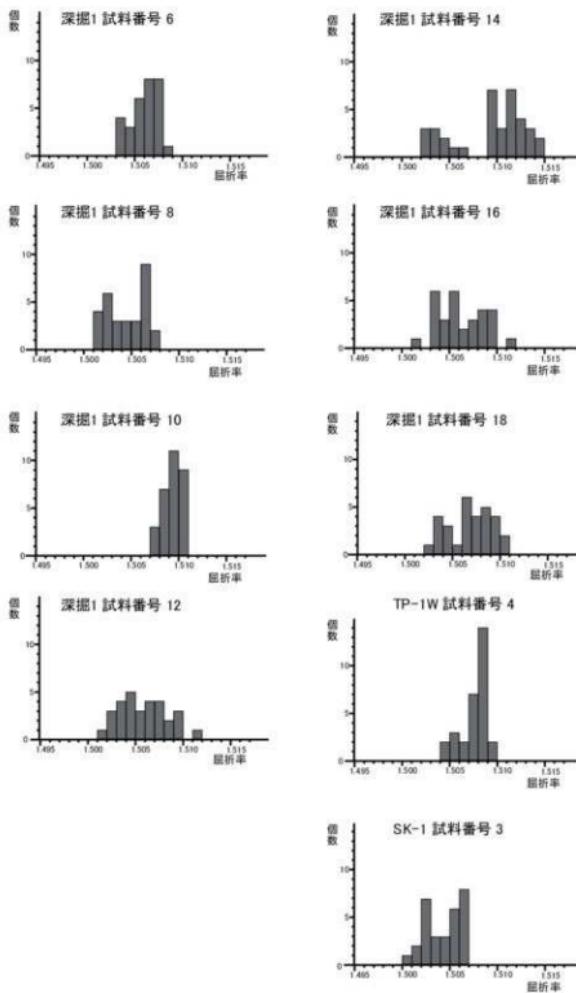
第5表 テフラ分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
深掘1 6	0 108	31	1	0	0 110	0 250	1	1	7 241	250				
深掘1 8	0 129	29	2	0	0 89	1 250	0	0	10 240	250				
深掘1 10	0 115	63	0	0	0 71	1 250	1	0	7 242	250				
深掘1 12	0 123	43	1	0	0 83	0 250	1	0	8 241	250				
深掘1 14	0 88	51	0	0	0 111	0 250	0	0	74 176	250				
深掘1 16	0 111	29	3	0	0 105	2 250	0	0	22 228	250				
深掘1 18	0 97	28	3	0	0 122	0 250	0	1	47 202	250				
深掘1 19	0 117	38	13	0	0 82	0 250	0	0	7 243	250				
深掘1 21	0 138	29	0	0	0 83	0 250	0	0	15 235	250				
深掘1 22	0 115	34	0	0	0 101	0 250	0	0	27 223	250				

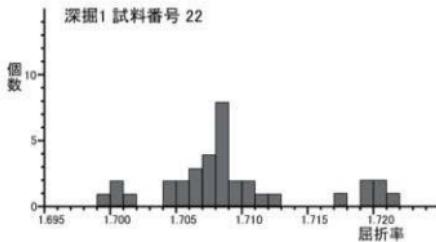
第6表 重鉱物火山ガラス比分析結果



第7図 重鉱物火山ガラス比



第8図 火山ガラス屈折率



第9図 斜方輝石の屈折率

4. 考察

(1) 植生について

深掘1から採取された試料番号18では、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。本試料では、植物遺体に由来する分析残渣が少ないとことから、もともと取り込まれにくかったこと、取り込まれた花粉やシダ類胞子が分解消失したことの、両方であった可能性が高い。

検出された花粉化石のうち、木本類ではクリ属がやや多く認められる。クリ属は虫媒花で、風媒花のように広範囲に花粉を散布する種類ではない。このクリ属が多く認められることを踏まえると、調査地周辺のごく近傍にクリ属が生育していた可能性がある。その他ではモミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹、シイ属などの常緑広葉樹、ニレ属一ケヤキ属などの落葉広葉樹が、少なくとも当時の遺跡周辺に生育していたことが窺える。

一方草本類では、イネ科、カヤツリグサ科など、開けた場所に草地を形成する種群が確認されている。よって、これらは調査地周辺の草地植生に由来すると考えられる。

SK-1の内部・底部（試料番号3）での植物珪酸体の産状は、比較試料とした深掘1（試料番号18）と比較して同様であった。そのため、SK-1の内部・底部にイネ科の植物体が集積していたとは考えにくい。今回の結果を見る限り、少なくともイネ科の内容物や構築物が存在した可能性を積極的に支持することは難しい。

なお植物珪酸体の産状からは、深掘の基本土層が形成された頃やSK-1が埋積する過程で、クマザサ属などのタケア科およびイチゴツナギア科などのイネ科が生育していたことがうかがえる。タケア科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986）。他の種類よりも残留しやすいことが知られている。そのため、今回の結果も植物珪酸体が残りにくいで残留しやすい分類群が見られたことを反映すると思われる。

(2) テフラについて

本遺跡は、その地理的位置から、十和田カルデラを給源とするテフラの降下堆積物が比較的厚く分布している範囲内にある。今回の調査で認められた土層の年代とされている縄文時代や旧石器時代は、十和田カルデラの活動ステージにおけるカルデラ形成期から後カルデラ期（Hayakawa, 1985）に相当することから、調査区内の土層断面で認められた降下軽石層およびテフラ分析で検出された軽石や火山ガラスおよびスコリアは、いずれも十和田カルデラを給源とするテフラに由来する可能性が高い。

今回のテフラ分析を行った試料の中では、深掘1の試料番号14以上、TP-1Wの試料番号4およびSK-1の試料番号3の各試料で軽石が検出されている。軽石の色調や発泡度および角閃石の斑晶を包有していることさらには共伴する火山ガラスの屈折率から、由来するテフラは十和田八戸テフラ (To-HHayakawa,1985) である可能性が高い。松山・大池 (1986) によれば、八戸市付近でTo-Hは1層から数層までのユニットが記載されており、そのうち軽石層の層相を示す層位は3層認められている。なお、To-Hの噴出年代は、暦年で1万5,500年前とされている (工藤,2008)。

深掘1における軽石と火山ガラスの産状により、To-Hの降灰層準は、試料番号14付近の4層下部に推定される。このことは、下位の炭化材から得られた年代とも矛盾しない。また、TP-1WやSK-1の各遺構覆土から検出されたTo-H由来の軽石は、遺構周囲の火山灰土中に含まれていたものが、遺構の埋積過程において遺構内に流れ込んだと考えられる。したがって、遺構の構築は古くともTo-Hの降灰以降であると考えられるが、それ以上の詳細な年代については現時点では不明である。

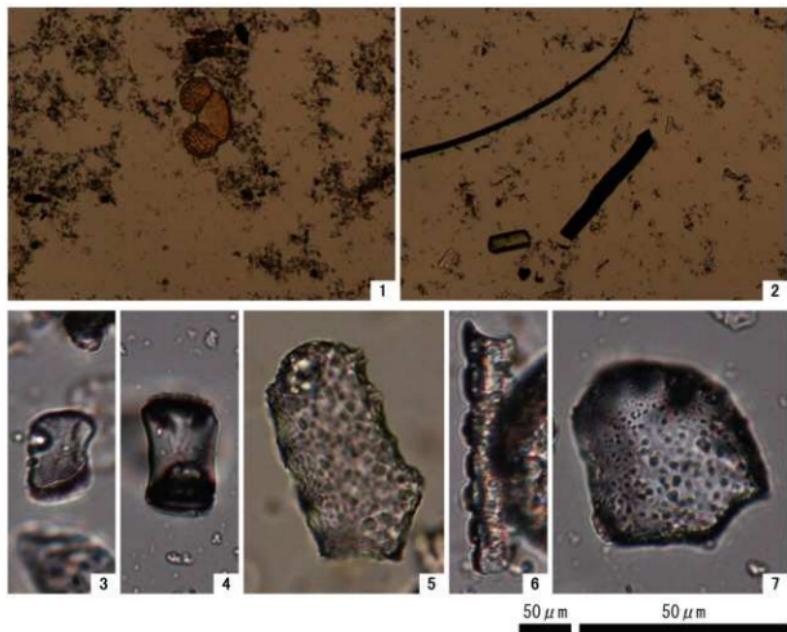
深掘1の試料番号18には、火山ガラスが中量含まれるが、その上位と下位の試料では火山ガラスは微量から極めて微量である。このような層位の産状からは、試料番号18の層位付近に火山ガラス質テフラの降下堆積のあつたことが推定される。バブル型の混在する形態組成とその屈折率および4万年前頃の放射性炭素年代を示す炭化材の産出層位であることなどから、試料番号18の火山ガラスは、十和田大不動テフラ (To-OfHayakawa,1985) に由来する可能性がある。試料番号16の火山ガラスも、形態組成や屈折率が試料番号18とはほぼ同様であることから、To-Ofに由来するものであろう。To-Ofは大規模な火碎流が噴出したテフラとして知られており、今回検出された火山ガラスは、火碎流に由来する火山灰である可能性がある。To-Ofの噴出年代については、小岩はか (2007) による放射性炭素年代で3万2,000年前前後という値が示されている。その暦年代は呈示されていないが、概ね暦年では3万6,000年前頃になるであろう。

深掘1の試料番号22からは少量のスコリアが検出されている。共伴する斜方輝石からは、幅広いレンジの屈折率が得られていることから、複数のテフラに由来する斜方輝石の混在が窺える。したがって現時点では、検出されたスコリアの由来するテフラを特定することはできない。放射性炭素年代との層位関係を考慮すると新しくとも4万年前以前に噴出したテフラであることが推定されるが、町田・新井 (2003) の記載などから、十和田カルデラを給源とするテフラの中でスコリアを含むテフラとしては、十和田合同テフラ (To-G; 松山・大池,1986) があげられる。詳細な噴出年代は明らかにされていないが、概ね酸素同位体ステージ4頃 (6~7万年前) の噴出とされている (佐瀬・細野,1999)。試料番号22のスコリアは降灰後の再堆積物がローム層中に混入したものと考えられる。

(引用文献)

- Bronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51, 337-360.
- 古澤 明.1995. 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101,123-133.
- Hayakawa,Y.1985.Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo.vol.60 ,507-592.
- Hua Q., Barbetti M., Rakowski AZ. 2013. Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. Radiocarbon, 55,2059-2072.
- 小岩直人・柴 正敏・葛西優貴.2007.青森県屏風山砂丘地帯、館岡層中の十和田大不動テフラのAMS14C年代.第四紀研究, 46,437-441.
- 工藤 崇.2008.十和田火山エピソードE及びG噴出物の放射性炭素年代.火山,53,193-199.
- 近藤純三.1982. Plant opal 分析による黒色腐植層の成因発明に関する研究.昭和 56 年度科学的研究費 (一般研究C) 研究成果報告書.32p.

- 近藤錦三,2010. プラント・オバール図譜. 北海道大学出版会,387p.
- 町田 洋・新井房夫,2003.新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会,336p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011.日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980.日本産花粉の標識 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12.13集,91p.
- 鳥倉巳三郎,1973.日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 杉山真二・藤原宏志,1986.機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学,19,69-84.
- Stuiver M. & Polach AH, 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.



1. 花粉分析プレパラート内の状況(深掘1:18)
 2. 花粉分析プレパラート内の状況(深掘1:18)
 3. クマザサ属短細胞珪酸体(深掘1:18)
 4. クマザサ属短細胞珪酸体(SK-1:3)
 5. クマザサ属機動細胞珪酸体(深掘1:18)
 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(深掘1:18)
 7. クマザサ属機動細胞珪酸体(SK-1:3)

写真図版 1 花粉分析プレパラート内の状況・植物珪酸体



1. 深掘1 6 軽石

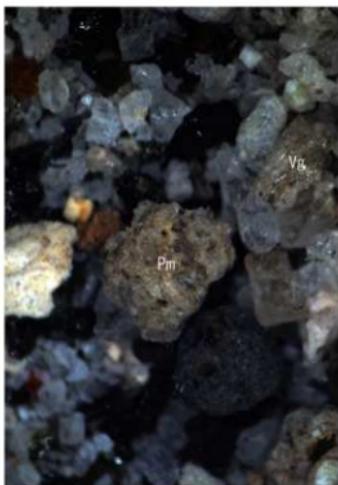


2. 深掘1 14 軽石



3. TP-1W 4 軽石

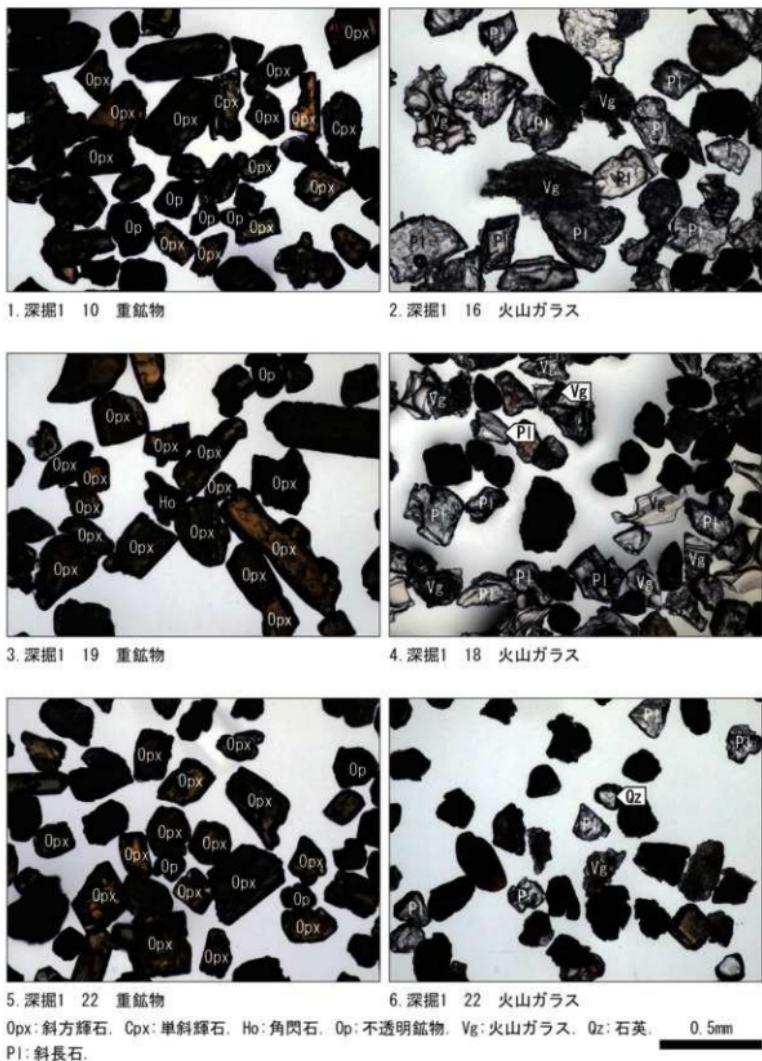
Pm: 軽石, Vg: 火山ガラス.



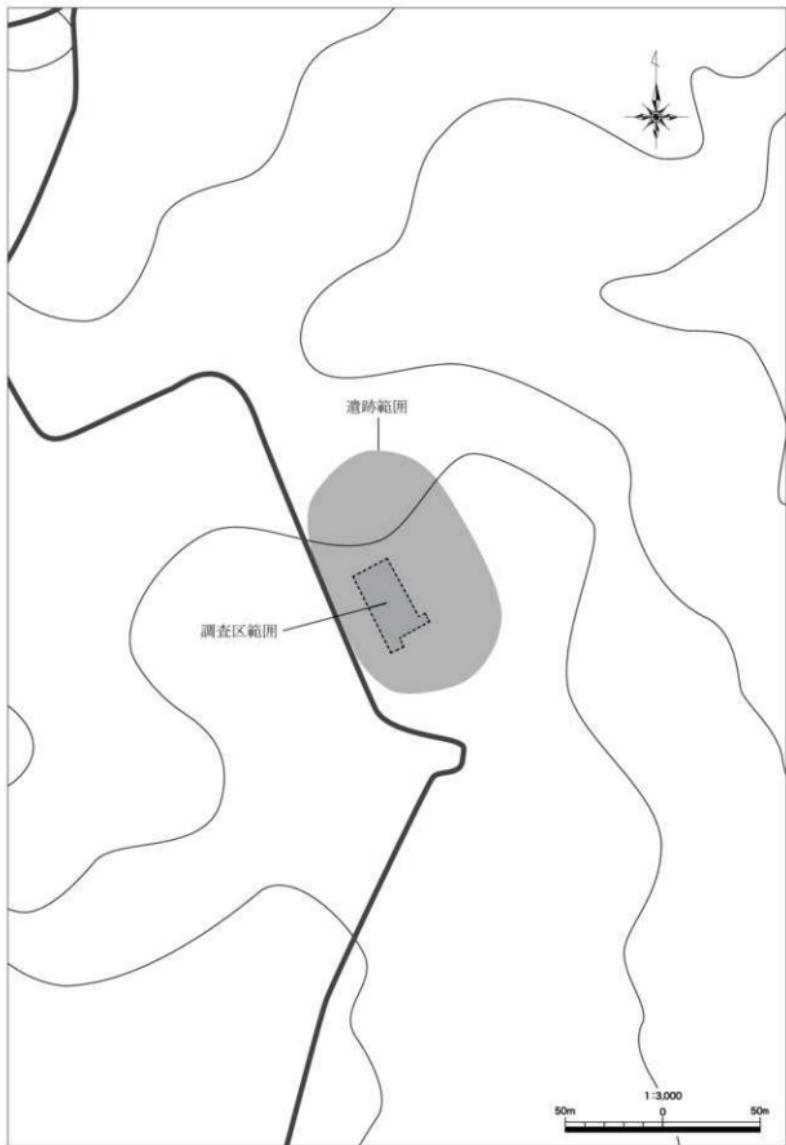
4. SK-1 3 軽石

2. 0mm 2. 0mm 1. 0mm
1 2 3, 4

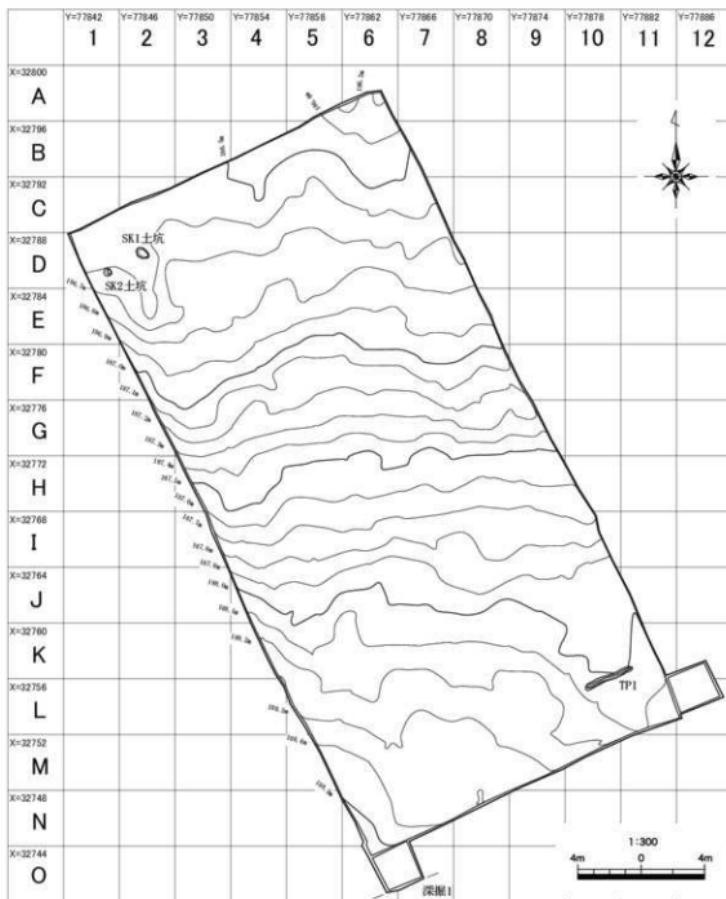
写真図版2 テフラ



写真図版3 重鉱物・火山ガラス



第10図 調査区範囲図



第11図 遺構配置図

VII. 調査の成果

1. 検出された遺構について

(1) 土坑跡

SK1 土坑（第12図、写真図版6）

D2グリッド北側に位置する。平面形は楕円形で、規模は開口部で長径100cm×短径65cm、底部で長径75cm×短径45cm、深さは最深部で30cmを測る。底面は平坦である。底部から壁は外傾して立ち上がり開口部へ至り、断面形は逆台形を呈する。5層に分層され、黒色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土が堆積する。遺構内からの出土遺物はない。

SK2 土坑（第12図、写真図版6）

D1グリッド南東側に位置する。平面形は楕円形で、規模は開口部で長径60cm×短径45cm、底部で長径50cm×短径25cm、深さは最深部で35cmを測る。底面は平坦である。底部から壁は直に立ち上がり外傾し開口部へ至る。断面形は円筒形を呈する。4層に分層され、黒褐色土を主体とし、黄褐色土が堆積する。遺構内からの出土遺物はない。

(2) 溝状土坑

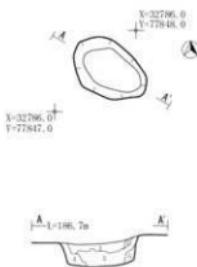
TP1 溝状土坑（第12図、写真図版6）

K11グリッド、K10グリッド、L10グリッドに跨り位置し、等高線に対して斜交する。平面形は細長楕円形で、長軸方向はN-24°-Eを示す。規模は開口部で長軸370cm×短軸40cm、底部で長軸345cm×短軸8cm、深さは中央部で60cmを測る。底面は平坦である。短軸断面形はU字状を呈する。堆積土は自然堆積の様相を示す。4層に分層され、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土が堆積する。遺構内からの出土遺物はない。

2. まとめ

土坑については出土遺物がなく、用途は不明である。溝状土坑いわゆる陥し穴状遺構が検出されたことから、当遺跡は狩猟場跡であることが明らかとなった。

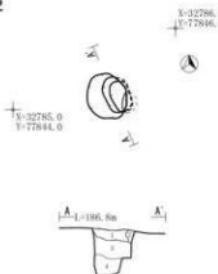
SK 1



SK1

- 1 10YR2/1 黒褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR5/6 黄褐色土 小粒1%入る
- 2 10YR5/6 黄褐色土 粘性中 締まり極めて密 草根入る
10YR6/8 明黄褐色土 極小・小粒1%入る
- 3 10VR3/3 黄褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR7/8 黄褐色土 大粒1%入る
10YR6/8 明黄褐色土 極小・小粒1%入る
- 4 10VR4/4 棕褐色土 粘性強 締まりやや密 草根入る
10VR5/8 黄褐色土 2cm×1cmのブロック下方に入る
10YR6/6 黄褐色土 大粒1%入る
- 5 10YR5/6 黄褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR6/8 明黄褐色土 極小・小粒1%入る

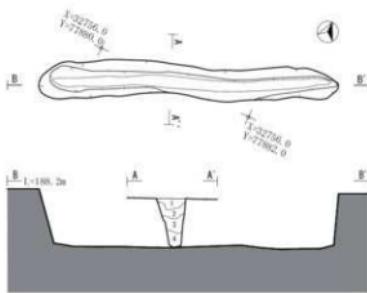
SK 2



SK2

- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR7/8 黄褐色土 極小～中粒2%入る
- 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR6/8 明黄褐色土 極小～中粒5%入る
- 3 10TR3/2 黑褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る 木根入る
10YR6/8 明黄褐色土 2cm×1cmのブロック入る
10TR5/8 黄褐色土 5cm×3cmのブロック壁際に入る
10TR5/6 黄褐色土 小・中粒7%入る
- 4 10YR5/6 黄褐色土 粘性強 締まり密 草根入る

TP 1

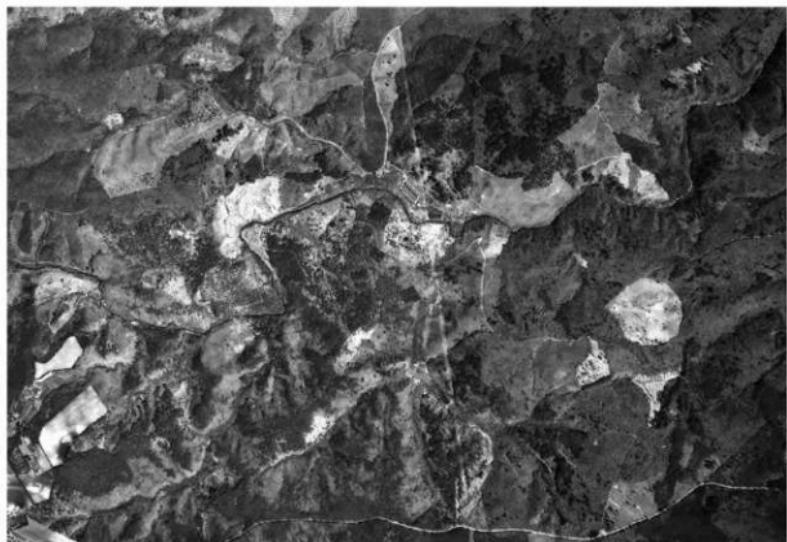


TP1

- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR6/8 明黄褐色土 10YR5/8 黄褐色土 極小～中粒5%入る
- 2 10YR3/3 黑褐色土 粘性強 締まり極めて密 草根入る
10YR5/6 黄褐色土 2cm×5cmのブロック壁際に入る
10YR6/8 明黄褐色土 10YR6/8 明黄褐色土 極小～中粒3%入る
- 3 10YR4/3 黑褐色土 黄褐色土 粘性強 締まり密 草根入る
10YR6/8 明黄褐色土 10YR5/8 黄褐色土 極小～中粒2%入る
- 4 10YR5/4 黑褐色土 粘性強 締まり密
10YR5/8 黄褐色土 極小・小粒2%入る

0 1:60 2m

第12図 土坑・溝状土坑



遺跡遠景（上が北）



遺跡近景

写真図版4 遺跡遠景・近景

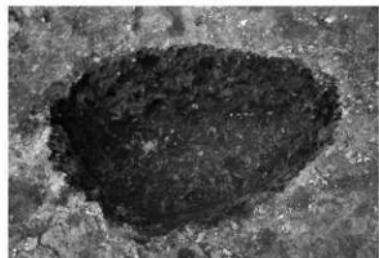


遺跡全景



深掘1土層序

写真図版5 遺跡全景・深掘1土層序



SK 1 完掘



SK 1 断面



SK 2 完掘



SK 2 断面



TP 1 完掘



TP 2 断面

写真図版6 土坑・溝状土坑

報告書抄録

ふりがな	しもむかいにいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	下向II遺跡発掘調査報告書							
副書名	太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	洋野町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	千田政博							
編集機関	洋野町教育委員会							
所在地	〒028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市23-27 TEL 0194-65-2111							
発行年月日	2019年10月10日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○・'・"	東經 ○・'・"	調査期間	調査面積	調査原因
しむかいでいせき 下向II遺跡	いわてけんくのへ 岩手県九戸 郡洋野町中 のだいち 野第1地割 地内	市町村 03507	遺跡番号 IF99-0251	39° 17' 29"	141° 44' 56"	20190409 ～ 20190424	1,250m ²	太陽光発電 所建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下向II遺跡	狩獵場跡	縄文時代	土坑 溝状土坑					

洋野町埋蔵文化財調査報告書第5集

下向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査

印刷 令和元年10月4日

発行 令和元年10月10日

発行 洋野町教育委員会

〒028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市23-27

TEL (0194) 65-2111

印刷 大東印刷株式会社

〒039-1103 青森県八戸市長苗代字内舟渡102-14

TEL (0178) 28-2348
